

前3千年紀メソポタミア、シリアのイエロバとノロバ：再考

前川 和也

The Donkey and the Persian Onager in Late Third Millennium B.C. Mesopotamia and Syria: A Rethinking

Kazuya MAEKAWA

かつて私は、シュメールではイエロバは (ANŠE.)DUN.GI と表記され、のち ANŠE.LIBIR と交代すると論じた。じつは(ANŠE.)DUN.GI は南部表現であり、シュメール中・北部では (ANŠE.)SIG₇、シリアでは (ANŠE.)IGI が用いられていた。(ANŠE.)DUN.GI、(ANŠE.)SIG₇、(ANŠE.)IGI、ANŠE.LIBIR には、ほぼ共通の読みを推定できる；(ANŠE.)DUN.GI: ^(anše)DUN-sig₁₇ ないし ^(anše)sig_x; (ANŠE.)SIG₇: ^(anše)še(g)_x; (ANŠE.)IGI: ^(anše)še(g)₂₀; ANŠE.LIBIR: ^(anše)še₂₀^{še3} ないし ^(anše)še(g)_x。さてメソポタミアでもシリアでも、(戦)車をひいたのは (ANŠE.)BAR.AN である。以前私はこの動物をペルシアノロバと比定したが、学界の大勢はこれをイエロバと「平原の<ロバ>」のあいだの交雑種とみなす。けれどもシュメールやシリア都市ではこの動物は生産されず、北メソポタミアやディヤラ流域（ペルシアノロバの生息域の一部）から高値で輸入されていた。やはりこの動物は交雑種でなく、ペルシアノロバと比定できる。

キーワード：イエロバ、ペルシアノロバ、シリアノロバ、メソポタミア、シリア

I have previously concluded that the donkey was referred to by the term (ANŠE.)DUN.GI (not anše) in Pre-Sargonic Sumer and that it was replaced by ANŠE.LIBIR in the Sargonic period (*ASJ* 1, *Zinbun* 16, 18, 1979-1982). It is now safely concluded that (ANŠE.)DUN.GI was mainly used in southern Sumer, while (ANŠE.)SIG₇ being a northern term for “donkey.” (ANŠE.)IGI, found in the contemporary texts of Ebla and Tell Beydar, is a local variant of (ANŠE.)SIG₇ (=IGI-gunû). The terms (ANŠE.)SIG₇ and (ANŠE.)IGI, possibly read ^(anše)še(g)_x and ^(anše)še(g)₂₀ respectively, mean “(donkey of) a yellow color.” Almost the same reading, with the same color denotation of the donkey, is given to (ANŠE.)DUN.GI; (ANŠE.) DUN.GI: ^(anše)DUN-sig₁₇ (=GI) or ^(anše)si(g)_x (=DUN.GI). A designation ANŠE.LIBIR (=IGI+ŠE₃), that seems to have been invented for “donkey” by the Akkadian archival institution, is understood to be ^(anše)še(g)₂₀^{še3} or ^(anše)še(g)_x.

Equids in the late third millennium B.C. (Maekawa)

period	equids				
	area	donkey	Persian onager	Syrian onager	horse
Early Dynastic III	Sumer: south	(ANŠE.)DUN.GI ¹	(ANŠE.)BAR.AN ⁵	anše-edin-na	—
	Sumer: middle and north	(ANŠE.)SIG ₇ ²			
	Syria	(ANŠE.)IGI ³			
Akkad	Mesopotamia, (Syria)	ANŠE.LIBIR ⁴	(ANŠE.)BAR.AN ⁵	anše-edin-na	—
Ur III	Puzriš-Dagan	ANŠE.LIBIR ⁴	(ANŠE.)BAR.AN ⁵	anše-edin-na	^(anše) si ₂ -si ₂
	Girsu, Umma etc.	anše			

1. (ANŠE.)DUN.GI : ^(anše)DUN-sig₁₇ or ^(anše)sig_x
2. (ANŠE.)SIG₇ : ^(anše)še(g)_x; 3. (ANŠE.)IGI : ^(anše)še(g)₂₀
4. ANŠE.LIBIR : ^(anše)še(g)_x or ^(anše)še₂₀^{še3}
5. also (ANŠE.)ŠU₂.AN etc.

My previous interpretation of (ANŠE.)BAR.AN as a term for the Persian onager, that has been caught and trained to pull the (war) cart, has been rebutted due to the reason that the wild ass is extremely difficult to tame. In recent Assyriological literature, the term has prevalingly been interpreted to denote a hybrid between a donkey and an “ass of the plain” (anše-edin-na). An important fact, however, is that foals called (ANŠE.)BAR.AN were seldom born within any urban centers in

Sumer and Syria. Ebla imported the young (ANŠE.)BAR.AN almost exclusively from Tell Brak in northern Mesopotamia. They were brought to Ur III Sumer from the Diyala settlements, occasionally from northern Mesopotamia. Since there is evidence that Persian onagers herded in the east of the Tigris in the third millennium B.C., my previous interpretation seems to remain valid. An assumption that they crossed donkeys with Syrian wild asses (anše-edin-na) in northern Mesopotamia and the Diyala region is unsustainable, because the country is almost beyond the habitat of these two kinds of equids, and because the Syrian wild ass is too small in size to be a parent of a cross. One would otherwise assume that the male Persian onager served the female donkey, but the offspring might be bad-tempered.

Key-words: Donkey, Persian onager, Syrian wild ass, Mesopotamia, Syria

I. ウマ科動物の呼称

I.1. 前川説

1970年代末から1980年代はじめにかけて書いたいくつかの論文で、私は前3千年紀後半のシュメールでのウマ科動物にかんして、つぎのように結論した (Maekawa 1979a, 1979b, 1991: 206-210, 前川 1980, Maekawa-Yıldız 1982)。

(1) 初期王朝 III 期 (前 2500 ~ 2350 年頃) のシュルバクやラガシュ出土文書では、イエロバ *Equus asinus*、ペルシアノロバ (= オナガー) *Equus hemionus onager*、シリアノロバ *Equus hemionus hemippus* は、それぞれ、(ANŠE.)DUN.GI、(ANŠE.)BAR.AN、anše-edin-na と呼称された。ウマ科動物にかかわる辞書テキスト (前 2 千年紀前半に成立、前 1 千年紀に最終確定) の冒頭では anše が *imēru* とアッカド語訳される。たしかに anše: *imēru* はイエロバを指すが、それは前 3 千年紀後半には妥当しない。当時、anše とよばれる亜属はいなかった。anše はウマ科動物の総称語として、または上記 3 語をかわって指示する語として用いられる¹⁾。

(2) アッカド時代 (前 2350 ~ 2100 年頃) には、イエロバは ANŠE.LIBIR と指示された。

(3) ウル第 3 王朝時代 (前 2100 ~ 2000 年頃) には、ギルス (かつてのラガシュ)、ウンマ、ウル、ニップルなどでは、ほとんどのばあいイエロバは anše と書かれた。けれども、諸地域からシュメールにとどけられる動物群の頭数を記帳し、一時的に管理するために設立されたプズリシュ・ダガンでは、あいかわらず ANŠE.LIBIR がイエロバを指していた。

(4) 人びとはペルシアノロバ (ANŠE.)BAR.AN を捕らえ、馴化して使役していた。オスは初期王朝期からウル第 3 王朝時代まで、4 頭立ての (戦) 車を牽いた。このようすが「ウルの軍旗」などに描かれている。いっぽう初期王朝 III 期のラガシュでは、主としてメスが犁に繋がれたが、ウル第 3 王朝時代までに犁耕にはほとんど用いられなくなる。

(5) シリアノロバは「平原の<ロバ>」anše-edin-na とよば

れたが、この動物が人間によって使役された証拠はない²⁾。

(6) ウマ *Equus caballus* は、ウル第 3 王朝時代になってシュメールにもたらされはじめる。M. シヴィルのいうように (Civil 1966: 121-122)、当初ウマを指す語はアッカド語 *sīšū* から借用された (^{anše}si₂-si₂)。ウマが ANŠE.KUR.RA (文字どおりには「異国の<ロバ>」) と呼称されるようになるのは、シュメール時代がおわってからのことである³⁾。

I.2. ザーリンス

J. ザーリンスは、西アジアのウマ科動物を総合的にあつかった博士論文 (Zarins 1976) から、前 3 千年紀についての章を切りはなして公刊した (Zarins 1978)。彼はシュメール行政文書にみえる諸語 anše、(ANŠE.)DUN.GI、ANŠE.LIBIR、(ANŠE.)BAR.AN を、イエロバ、ウマ、ウマ、ラバと解釈した。彼も私とおなじく、初期王朝 III 期の (ANŠE.)DUN.GI [彼は anše-šul-gi と読む] がのち ANŠE.LIBIR と交代することは認めていたが、いっぽうで (ANŠE.)DUN.GI や (ANŠE.)BAR.AN とはべつに亜属 anše (イエロバ) が存在するという伝統的解釈に拠っていた。彼は ANŠE.LIBIR をウマと解釈した I. J. ゲルブ (Gelb 1955: 244-247) を踏襲して、(ANŠE.)BAR.AN をラバと比定した。オヤはオス・イエロバ anše とメス・ウマ (ANŠE.)DUN.GI / ANŠE.LIBIR だという。

I.3. テュービンゲン・シンポジウム、ポストゲイト、ハインベル

1982年にテュービンゲンで、古代西アジアのウマ科動物を主題とするシンポジウムが開かれた。動物考古学と文献学がはじめて本格的に交流したのである。報告書は4年後に公刊され (Meadow-Uerpmann eds. 1986)、以後の研究におおきな影響を与える。集会では J. N. ポストゲイトが私とザーリンスを「統合」した (Postgate 1986)。彼も、ほんらいイエロバは anše ではなく (ANŠE.)DUN.GI / ANŠE.LIBIR とよばれたことを認め、いっぽうザーリンスを継承して (ANŠE.)BAR.AN を交雑種とみなした。彼に

よれば、私の説は2亜属（シリアノロバ、ペルシアノロバ）がメソポタミアに生息していたとする点で無理があるという。またアジアノロバを人間が本格的に使役したことは、ほかには知られておらず、シュメール時代にペルシアノロバが戦車を牽いたということはありえない。(ANŠE.)BAR.AN に対応するアッカド語 *parû* はラバを指し、(ANŠE.)BAR.AN とは、ノロバ *anše-edin-na* とイエロバ (ANŠE.)DUN.GI / ANŠE.LIBIR / *anše* の交配の結果だという。

チュービンゲン・シンポジウムののちには、W. ハイネベルも (ANŠE.)DUN.GI、ANŠE.LIBIR をイエロバとみなした。またノロバの使役は不可能であることを強調して、(ANŠE.)BAR.AN をイエロバとノロバのあいだの交雑種<ラバ>と解釈した (Heimpel 1990, 1994:10²³, 1995: 89-91, 2003-2005)。

ポストゲイト説とハイネベル説は同一ではない。ポストゲイトは *anše-edin-na* がシリアノロバ、ペルシアノロバのどちらであるか不明だとし、また、(ANŠE.)BAR.AN をオス・イエロバとメス・ノロバの雑種とする説に傾いている。ハイネベルは明快である。人びとはオス・シリアノロバ *anše-edin-na* とメス・イエロバを交配して (ANŠE.)BAR.AN を作り出したという。ともあれ、それ以後かならずポストゲイトやハイネベル論文が援用され、結果として (ANŠE.)BAR.AN = ペルシアノロバ説を採る研究者は、ほとんど存在しなくなってしまった⁴⁾。

I.4. 新情報と新論点

そののち、ウマ科動物の情報が格段にふえた。まずシリアで出土した前24世紀の文字史料が、この問題にあらたな光をあてた。ザーリンスや私が論文を書いたときにはテル・バイダルやマリの文書は知られていなかったし、のちにエブラ文書研究が飛躍的に進展したのである。そして動物考古学も新情報をもたらすようになった。チュービンゲン・シンポジウム報告の続編も公刊された (Meadow-Uerpmann eds. 1991)。またテル・ブラクの発掘は、(ANŠE.)BAR.AN について重要な視点をもたらした。したがってここで、新史料をも利用して、前3千年紀のウマ科動物にかんして、あらためて、以下の諸点を論じたい。

(1) 初期王朝 III 期には、イエロバはシュメール南部では (ANŠE.)DUN.GI であったが、中・北部では、主に (ANŠE.)SIG₇(=IGI-*gunû*) と表現された。いっぽう、ほぼ同時期のシリアのテル・バイダルやエブラ出土の文書では、イエロバは (ANŠE.)IGI とされていた。(ANŠE.)SIG₇ と (ANŠE.)IGI には共通の音価を想定できる。つづくアッカド時代には、各地で ANŠE.LIBIR(=IGI+ŠE₃) という呼称が採用されたが、これにもおなじ読みが与えられていた

はずである。そして南部の語 (ANŠE.)DUN.GI も、北部の諸語とおなじように読まれていたであろう。

(2) テル・バイダルや同時期のエブラ文書、テル・ブラクの発掘成果は、(ANŠE.)BAR.AN = 交雑種説を補強するとして援用される。けれども私は、新材料は (ANŠE.)BAR.AN をペルシアノロバとする見解に有利に働いていると思う。前3千年紀にはペルシアノロバは、北メソポタミアやティグリス東岸地方で捕らえられたのち、馴化されて、南部メソポタミアやシリアの諸都市に送りだされていた、というのが私の結論である。

II. イエロバ

II.1. イエロバ：(ANŠE.)DUN.GI、(ANŠE.)SIG₇、(ANŠE.)IGI

イエロバ (ANŠE.)DUN.GI は、シュメール南部のウルから出土した文書（初期王朝 I 期末ないし II 期）に言及されている (UET 2 127, obv. i 7: 1¹ ANŠE.DUN.GI)。それ以前の古拙文書には、ウマ科動物についての本格的な記述は存在していないという (Englund 1998: 143³²⁶)。なお初期王朝 III 期ウル出土の 1 文書にも DUN.GI がみえる (Alberti-Pomponio, StPohl 13 No. 43, obv. 1)。

イエロバを (ANŠE.)DUN.GI と表記するのはシュメール南部の伝統であり、中・北部ではふつう (ANŠE.)SIG₇ と書かれていた。(ANŠE.)SIG₇、(ANŠE.)BAR.AN、*anše-edin(-na)* が北部のニップルの 1 文書（初期王朝 III 期）にみえるのに、南部のラガシュ出土の文書群では (ANŠE.)DUN.GI、(ANŠE.)BAR.AN、*anše-edin-na* が言及され、(ANŠE.)SIG₇ は発見できないからである。中部のシュルパクの文書群では、(ANŠE.)DUN.GI と (ANŠE.)BAR.AN、あるいは (ANŠE.)SIG₇ と (ANŠE.)BAR.AN が組みあわされ、(ANŠE.)DUN.GI と (ANŠE.)SIG₇ はけっして同一テキストで共存しない。私はこのことの深刻な意義を、堀岡晴美さんに教えられるまで認識できなかった。

ラガシュ出土 Fö 160、Nik 1 203 とニップル出土 OSP 1 100 を比較してみよう。

Fö 160, [Sect. 1] obv. i 1) 33 SAL.ANŠE-ama-GAN.ŠA, 2) 11 kir mu-3, 3) 7 kir mu-2, 4) 5 kir mu-1, 5) 1 nita-DUN.GI mu-1, 6) 1 SAL-BAR.AN mu-1, 7) 5 nita-BAR.AN mu-1, ii 1) 4 giš₃-DU, 2) 2 ga-gu₇-a, 3) šu-nigin₂ 70 la₂-1 En-ku₅;...; [Sect. 4] iii 7) 4 nita-DUN.GI mu-3, iv 1) 5 nita-DUN.GI mu-2, 2) 1 SAL-BAR.AN mu-2, 3) 2 nita-BAR.AN mu-2, 4) Ur-pu₂, 5) sipa-amar-ru-ga, [Sect. 5] 6) 1 SAL-edin-na mu-2, 7) Lugal-ša₃-la₂-tuk; [Sect. 6] rev. v 1) šu-nigin₂ 53 SAL-ama, 2) 10 kir mu-3, 3) 10 la₂-1 kir mu-2, 4) 7 kir mu-1, 5) 6 nita-DUN.GI mu-1, 6) 1 SAL-BAR.AN mu-1, 7) 5 nita-BAR.AN mu-1, vi 1) 4 giš₃-DU, 2) 4 ga-gu₇-a, 3) 10 la₂-1 nita-DUN.GI amar-ku₅, 4) 1 SAL-

BAR.AN amar-ku₅, 5) 2 nita-BAR.AN amar-ku₅, 6) 1 SAL-edin-na mu-2, vii 1) gu₂-an-še₃ 120 la₂-7 anše tur-maḥ-ba, 2) anše gurun₂-ma šid-da, 3) Bara₂-nam-tar-ra, 4) dam Lugal-anda, 5) ensi₂-, 6) Lagaš^{ki}-ka, viii 1) ensi₂-ke₄, 2) Lagaš^{ki}-a, 3) gurun₂-bi e-ak, 5.

Nik 1 203, obv. i 1) 8 SAL-ama-ANŠE.DUN.GI, 2) 1 SAL-DUN.GI mu-2, 3) 1 nita-DUN.GI mu-1, 4) 2 nita-DUN.GI ga-gu₇-a, ii 1) 1 nita-BAR.AN mu-2, 2) šu-nigin₂ 13 Ur-^dIgi-ama-še₃, 3) anše u₂-rum Geme₂-^dNanše-kam, 4) 5 SAL-ama-DUN.GI, iii 1) 2 SAL-DUN.GI mu-3, 2) Lu₂-na-nam, 3) anše u₂-rum, 4) Munus-sa₆-ga-kam, ...

OSP 1 100, obv. i 1) 32 SAL.ANŠE-ama-GAN, 2) 7 amar-sig ANŠE.BAR.AN, 3) 2 amar-sig SAL.ANŠE.SIG₇, 4) 6 SAL.ANŠE-edin, 5) 2 amar SAL.AN[ŠE]-e[din], 6) 2 am[ar], ii 1) 4 ANŠE.DUN kaš₄, 2) Ur-^dŠe₃-ri₅-da, 3) sipa-anše-pi, 4) X.[], (missing), rev. iii (missing), 1') mu [], 2') e₂ šu-g[ur]²-ra², 3') an-si-ga.

Fö 160 は、ラガシュ支配者妃の組織で飼われていたウマ科動物についての、もっとも詳細な記述である (Maekawa 1979a: 115-116, 前川 1980: 141 以下)。ここでは合計 113 頭のウマ科動物が点検されているが、うち 9 頭はオスおよびメスのワカ・(ANŠE.)BAR.AN であり、1 頭は 2 オメス・anše-edin-na であった。明示されていないが、のこりはすべて (ANŠE.)DUN.GI である。

Sect. 1 によれば、33 頭の成メス (SAL.ANŠE-ama-GAN.ŠA)、23 頭の 3、2、1 オメス (kir mu-3, kir mu-2, kir mu-1)、1 頭の 1 オオス・(ANŠE.)DUN.GI、1 頭の 1 オメス・(ANŠE.)BAR.AN、5 頭の 1 オオス・(ANŠE.)BAR.AN、種オス (giš₃-DU) 4 頭、2 頭の乳飲み仔 (ga-gu₇-a)、計 69 頭を Enku が管理していた。(SAL.ANŠE-)ama-GAN.ŠA, kir はそれぞれ成メス (文字どおりには「経産メス」)、ワカ・メスを意味する語であるが、ここではメス・(ANŠE.)DUN.GI を指す。たとえば「1 オオス・(ANŠE.)DUN.GI」、「1 オオス・(ANŠE.)BAR.AN」、「1 オメス・(ANŠE.)BAR.AN」が存在するのに、「1 オメス・(ANŠE.)DUN.GI」という表現はない。「1 オワカ・メス」kir mu-1 が (ANŠE.)DUN.GI の 1 オメスを指しているからである。種オスは giš₃-DU とよばれていた (ii 1 [=vi 1])。これらが (ANŠE.)DUN.GI のチチであった。いいかえれば、2 頭の「乳飲み仔」(ii 2) も (ANŠE.)DUN.GI だったろう。すでに私は、(ANŠE.)BAR.AN はこの<群れ>で生まれたのではなく、外部から導入されたことを論証している (Maekawa 1979: 114-118; 前川 1980: 152)。つまり Fö 160 にもとづいて、(ANŠE.)BAR.AN のハハがメス・(ANŠE.)DUN.GI だと結論することは、およそ不可能である。なおオス・(ANŠE.)DUN.GI とメス・(ANŠE.)BAR.AN は、2 オ前後に<群れ>からはなれ、去勢され、

訓練をうけたのち (Sect. 4: obv. iii 7-iv 5)⁶⁾、4 オ頃にはじめて耕地で使役される。やはり 2 オ頃に<群れ>をはなれるオス・(ANŠE.)BAR.AN は、訓練ののち、主として車に繋がれる。この文書で 1 頭の 2 オメス・「平原の<ロバ>」が記述されているが (iv 6-7 [=vi 6]: SAL-edin-na mu-2)、この個体は (ANŠE.)DUN.GI や (ANŠE.)BAR.AN の飼育者とは別人によって管理されている。

Nik 1 203 は、王女たちが所有する小型の<群れ>を扱い、成メス 13 頭、3 オメス 2 頭、2 オメス 1 頭、1 オオス 1 頭、乳飲み仔 2 頭をすべて (ANŠE.)DUN.GI と明示している。この<群れ>にも 1 頭の 2 オオス・(ANŠE.)BAR.AN が含まれる。ただ、種オスはいない。

メス・(ANŠE.)DUN.GI と 2 オ前後までのオス・(ANŠE.)DUN.GI、そして種オスが<群れ>を構成し、そこに少数の (ANŠE.)BAR.AN、まれに anše-edin-na が導入される。これがラガシュ文書から抽出できる基本原則である。まちがいがなく (ANŠE.)DUN.GI はイエロバを指す。

ニップル出土 OSP 1 100 には、32 頭の経産メス (SAL.ANŠE-ama-GAN: obv. i 1) を中心とする<群れ>が記述される。第 3 行には (ANŠE.)SIG₇ のワカ・メスがみえ、第 2 行のワカ・(ANŠE.)BAR.AN、anše-edin(-na) (4、5 行) と並記される。「経産メス」とはメス・(ANŠE.)SIG₇ のことだと考えるのが、もっとも自然であろう。成メス・(ANŠE.)BAR.AN を核とする<群れ>は、どのテキストにも言及されていない。やはりワカ・(ANŠE.)BAR.AN と anše-edin(-na) がメス・(ANŠE.)SIG₇ の<群れ>に導入されて飼育されていたと想定される⁶⁾。

中部のシュルパク文書には、メスを中心とする<群れ>は記述されていないが、ウマ科動物がどのように用いられていたかは、文書からよくわかる。以下、(ANŠE.)DUN.GI と (ANŠE.)BAR.AN あるいは (ANŠE.)SIG₇ と (ANŠE.)BAR.AN の共存の記述例を引いておく。

TSŠ 131 では、23 頭の (ANŠE.)DUN.GI、7 頭の (ANŠE.)BAR.AN、1 頭の anše-edin(-na)、2 頭のウシが数えられている。TSŠ 131, obv. i 1) 6 ANŠE.DUN.GI, 2) 2 SAL.ANŠE.DUN.GI, 3) 2 gu₄, ii 1) 1 anše-edin, 2) Lugal-^dDumu-zi, 3) 10 ANŠE.DUN.GI, 4) 5 SAL.ANŠE.[DUN.GI], rev. iii 1) 5 ANŠE.BAR.AN, 2) Lu₂-URU×ZA, 3) 2 ANŠE.BAR.AN, iv 1) E₂-ki, 2) gu₂-an-še₃, 3) 23 ANŠE.DUN.GI, 4) 7 ANŠE.BAR.AN, 5) 2 gu₄。堀岡晴美さんは、シュメール南部で教育をうけた書記がこの文書を作成したと推定している。これは (ANŠE.)DUN.GI をシュメール南部に特有な表記とする私の考えを補強する⁷⁾。

TSŠ 134 には、28 頭の (ANŠE.)SIG₇ と 11 頭の (ANŠE.)BAR.AN がみえる。これらの大部分は犁耕に用いられたのであろう。耕地経営の責任者 engar が管理しているからで

ある。TSS 134, obv. 1) 11 ANŠE.AŠ¹.AN, 2) 21 ANŠE.SIG₇.ŠUBUR, 3) engar, ii 1) 7 SAL.ANŠE.SIG₇, 2) UR.UR, rev. iii 1) gu₂-an-še₃, 2) 40 la₂-l anše.

シュルパク文書では、(ANŠE.)DUN.GI ないし (ANŠE.)SIG₇ はつねに (ANŠE.)BAR.AN よりも頭数がおおい。(ANŠE.)DUN.GI と (ANŠE.)SIG₇ は同一種で、ありふれたウマ科動物つまりイエロバを指している。かつての私だけでなく、文書を総合的に研究した F. ポンポニオらも、このことに気がついていなかった (Pomponio et al. 1994: 308)。

シュルパク官職リスト Early Dynastic Lu C にみえる SIG₇.UŠ は、いまや SIG₇-us₂ 「イエロバ追い」と理解できる。この語の前後は、ほとんどすべて大家畜の管理にかかわる職業名だからである。ED Lu C: SF 45 Nr. 47 (ed. MSL 12 14-15), obv. v 1) DU.DI, 2) gab₂-ra₂, 3) sipa-anše, 4) lu₂-ḥar-anše, 5) in-TAR, 6) lu₂-e₂-gigir₂, 7) kuš₇, rev. vi 1) usan₃-du₃, 2) gu-la₂, 3) SIG₇.UŠ, 4) lu₂-EN.IL, 5) lu₂-gu₄-DI.DU:DU, 6) lu₂-anše-DI.DU:DU, 7) lu₂-maš₂-nita-ḥi.

II.2. イエロバ (IGI) と BAR.AN : エブラ

シュルパクやラガシュ文書とほぼ同時期のシリア (エブラ、テル・ベイダル) 行政記録では、イエロバは (ANŠE.)IGI と書かれる。まずエブラをみよう。文書にはウマ科動物として IGI と BAR.AN があらわれ、anše-edin<na> は発見できない。

ARET II 25 (表1)⁸⁾ では、ウシ gu₄、ヒツジ udu、IGI および BAR.AN が記録される。Sect. 7 では、ヒツジとは区別されて、ウシ、IGI、BAR.AN の頭数が合計される。けれども 1、4、5 ではウシと IGI がまとめられて、BAR.AN やヒツジとはべつに数えられる。6 ではウシと IGI とが区別される。まちがいなく BAR.AN はメソポタミア地方のテキストにみえる (ANŠE.)BAR.AN と同一動物なのだから、IGI をイエロバと考えれば、この文書は容易に理解できる。ただ文書は、IGI と BAR.AN を同一範疇の動物とはみなしていない。これは BAR.AN がイエロバ (IGI) とノ

ロバの交雑種であるという説にとって、あまり都合がよい⁹⁾。

ARET II 23, obv. i 1) 80 IGI-SAL tu-da, 2) 10 BAR.AN-nita 5 4 3 mu, 3) 14 BAR.AN-SAL 5 4 3 mu, ii 1) 4 BAR.AN-tur nita, 5 BAR.AN-SAL tur 1 mu, 2) 2 IGI-nita 3 mu, 3) lu₂ 2 šu, 4) Ba-du-LUM, 5) ugula-APIN, iii 1) 72 IGI-SAL tu-da, 2) 11 BAR.AN-nita 5 4 3 mu, 3) 5 BAR.AN-SAL 5 4 3 mu, rev. iv 1) 2 BAR.AN-SAL tur 1 mu, 2) lu₂ 2 šu, 3) In-gar₃, 4) ugula-BAR.AN-BAR.AN, v 1) IGI+ḤI-du₈. ARET II 23 は、「経産メス・IGI」IGI-SAL tu-da を核とする 2 群の点検表である。第 1 群 (i 1-ii 5) は犁耕責任者 ugula-APIN、2 群 (iii 1-iv 4) は (戦)車動物チームの監督官 ugula-BAR.AN-BAR.AN によって管理されている。両群にはオス・IGI がほとんどいず、いっぽう 5 才までのワカ・BAR.AN がかなりの数で飼われている。第 1 群にはメス・BAR.AN が、2 群にはオスがおおい。この文書はラガシュの Fö 160 とおなじように、役畜を供給する<母群>を記録していると思われる。外部から<群れ>に導入された BAR.AN は、IGI とちがって、5 才頃まで<群れ>で調教されたという解釈である。

II.3. イエロバ ((ANŠE.)IGI) と (ANŠE.)BAR.AN : ナバダ

1990 年代の中葉以降、シリア北西部のテル・ベイダル (古代名ナバダ) で 200 枚をこえる粘土板 (前 24 世紀) が出土し、当時ナバダは 45 キロ東のナガル (遺跡名テル・ブラク) の支配下にあったことがあきらかになった。文書にみえるウマ科動物は (ANŠE.)IGI、(ANŠE.)BAR.AN、anše-edin<na> であり、(ANŠE.)IGI は主として犁耕に、(ANŠE.)BAR.AN は 4 頭立ての車を牽くのに用いられた。anše-edin<na> の記述は限定的である。研究者は一致して、(ANŠE.)IGI はイエロバを指すという。そして、エブラ文書研究を主導するアーキは、ナバダの (ANŠE.)IGI とエブラの IGI はともにイエロバを意味し、シュルパクやニップル文書の (ANŠE.)SIG₇ の変異体だとみなすにいたった (Archi 1998: 11-12)¹⁰⁾。私も同意する。

表1 ARET II 25⁸⁾ (エブラ)

動物 管理官	gu ₄ -gu ₄	IGI.NITA	BAR.AN-BAR.AN	udu-udu
1. Sa ₂ -gu ₂ -si (ugula)	1000 × X ₁		60	9400
2. Ik-na-Da-mu	800	—	—	3700
3. Ib-u ₃ -MU-ut	1000 × X ₂ +500	—	—	3400+100 ¹
4. I-ti-Ga-mi-iš (ugula)	1000 × X ₃ +430		28	2000
5. Ir ₃ -kab-ar (ugula)	800		—	9800
6. I-bi ₂ -Zi-kir (ugula)	2600	1000 ²	570	7700
7. 計		11788 ³		36100 ⁴

II.4. イエロバ:「黄(褐)色(の<ロバ>)」(1)

SIG₇は、IGIに数本の横線を加えた強調形(IGI-gunû)にすぎないのだから、ウマ科動物を指示するSIG₇とIGIは、同一音価をもっていただと考えてよい。私は/še(g)/を想定する((ANŠE.)SIG₇:^(anše)še(g)_x; (ANŠE.)IGI:^(anše)še(g)₂₀)。

前3千年紀後半のシュメール南部では、SIG₇は複数動詞語基「生きる」として用いられ、音価/sig/、/se/が想定されるが、北部のニップルでは/še/と発音されていたと推定できる(Steinkeller 1985)。ときにSIG₇でなくšeがあらわれるからである(e.g. OSP 1 26, rev. iii' 4': an-da-še)。南部のラガシュでも、SIG₇「涙を流す」が/še(g)/と読まれていたらしい¹¹⁾。

シュメールでは、しばしばSIG₇(=IGI-gunû)にかわってIGIが用いられた。たとえばシュルパク文書にみえる人名Lugal-BI⁷×IGI(TSS 794, rev. vii 5')は、Lugal-šimbi₃(BI⁷×SIG₇) (e.g. TSS 1, obv. ii 2)の簡略形である。のちの辞書テキストでigi-sig₇とigi-IGI-IGIが同義として併記されるが(e.g. OB Lu-Series, Rec. B [MSL 12 183] iv 42-44)、これもSIG₇とIGIが交替できた例である。この慣用句は目に疾患があることを意味するが、もともと「目を青くする」だったかもしれない。SIG₇は色彩<黄-青>を表す語でもあったからである。

アッカド時代ははじめまでにシュメール中・北部で成立した『バートン・シリンドー』にNI+IGIがみえる。これはnisig_xと読まれ、後代のnisig(=SAR)「緑」、「緑地」に対応する¹²⁾。これもIGIとSIG₇の交替を示唆する。nisigは*ni_g-SIG₇に由来するらしい(Landsberger 1967: 141¹⁴⁾)。

アッカド時代には、(ANŠE.)DUN.GI、(ANŠE.)SIG₇、(ANŠE.)IGIにかわって、ANŠE.LIBIR(=IGI+ŠE₃)が用いられる。かつて私は、この変化の理由を説明できなかった。ANŠE.LIBIRがみえる粘土板は、ラガシュ、ウンマ、アダブ(e.g. OIP 14 117)といったシュメール都市、ディヤラ河流域地方(e.g. MAD 1 6)、北イラクのガスル[のちのヌジ](e.g. HSS 10 202)、イランのスサ(MDP XIV 59)で発見されている。ANŠE.LIBIRの出現は、アッカド帝国各地で画一的な文書行政システムが採用されたことと関係しているのであろう¹³⁾。アーキは、ANŠE.LIBIRが簡略化され、(ANŠE.)IGIとなったと考えている¹⁴⁾。そうではあるまい。(ANŠE.)IGIや(ANŠE.)SIG₇に言及する文書は、すべてANŠE.LIBIRをもつテキストよりも年代的に先行する。だから、私はANŠE.LIBIRを^(anše)še(g)_x(=LIBIR)あるいは^(anše)še(g)₂₀(=IGI)^{sc3}と理解する。ANŠE.LIBIRは新造語であり、イエロバの(北部)発音/še(g)/を示すためにLIBIRサイン内のŠE₃を1種のphonetic indicatorとして機能させているのであろう¹⁵⁾。(ANŠE.)SIG₇[=^(anše)še(g)_x]、(ANŠE.)IGI[=^(anše)še(g)₂₀]、ANŠE.LIBIR[=^(anše)še(g)_xないし^(anše)še(g)₂₀(=IGI)^{sc3}]は、「黄(褐)

色(の<ロバ>)」という意味だったであろう。

II.5. イエロバ:「黄(褐)色(の<ロバ>)」(2)

シュメール南部の呼称(ANŠE.)DUN.GIと中・北部の(ANŠE.)SIG₇に、ほぼ同一の音価が想定されるべきである。そうでなければ、中部のシュルパクで両呼称が共存する理由が説明できない。私は(ANŠE.)DUN.GIに、^(anše)DUN-sig₁₇あるいは^(anše)sig_x(=DUN.GI)という読みを提案したい。[ただ構成要素DUNについては、まだ結論を得ることはできない¹⁶⁾。]これはGI(=sig₁₇)が「黄(褐)色」を意味し、そして南部表現も中・北部の(ANŠE.)SIG₇も、ともに「黄(褐)色(の<ロバ>)」を意味したという解釈である。家畜化されてまもないイエロバの体色が黄(褐)色と認識され、それがイエロバの呼称となったのである。イエロバの祖先と考えられるアフリカノロバ(ソマリノロバおよびヌビアノロバ)の体色を考えれば、これは納得できることである¹⁷⁾。

後代には、sig₇(-sig₇)が<黄色-青>を表すが、前3千年紀には、GI(=sig₁₇)も同じ色彩を指していた。まず、KU₃.GI(「金」)はのちまでku₃-sig₁₇と読まれた(「黄(褐)色の貴金属」。cf. ku₃-babbar「白色の貴金属」=銀)。またウル第3王朝時代に、ヒツジを指示する諸語がGIをとまうことがある(udu-GI, sila₄-GI, u₈-GI, kir₁₁-GI)。これは、ヒツジ体毛の色彩表現GI(=sig₁₇)であって(Steinkeller 1995: 56)、「アシgiを飼料として与えられるヒツジ」などと解すべきではない。

前3千年紀にGIがsig₁₇と読まれた例として、(e-)GI(=sig₁₇)^{musen}をあげておく。前1千年紀の辞書テキストでe-sig^{musen}と表記される鳥名は、文学テキスト(前2千年紀)でもe-sig^{musen}と書かれるが、ときにe-sig₁₇(=GI)^{musen}もみえる(SP 21, Sect. A 5: 6; SP 24.11: 6)。ウル第3王朝時代の行政文書では一貫してe-sig₁₇^{musen}とある(e.g. MVN 13 740)。さらにシュルパク(初期王朝III期)の動物リストではsig₁₇^{musen}とされるが(SF 58 Nr. 58, viii 23)、ほぼ同一内容のエブラ出土鳥類リストにはšeg₉^{musen}とある(MEE 3 No. 39, iv 7)。sig₁₇がšeg₉にかわるのである。シュメール中・北部やシリアで、(ANŠE.)SIG₇内のSIG₇が/še(g)/と理解されていたという私の仮説を補強する。

ウマ科動物にかんする辞書テキスト(前1千年紀)第2行で、ANŠE.LIBIRはagāluと訳される(ḪAR-ra XIII 355 [MSL 8/1 50])。agāluの語義が不明で、しかも前行にanše: imēriとあるから、かつてはANŠE.LIBIRの解釈が大混乱したのだけれども、いまやこれは「イエロバ」の意としてアッカド時代に創出された語だと結論できる。さて研究者は、ANŠE.LIBIRの読みとして一連の辞書テキストにみえる/dusu/を採る(ANŠE.LIBIR:^(anše)dusu₂)。けれどもこれは、

dusu「バスケット」から連想された2次的な読みではなかろうか(「荷ロバ」)。別系統の辞書テキスト(Diri II 131 [MSL 15 126]; Antagal F 44 [MSL 17 214])では、(ANŠE.) LIBIRに音価/siが与えられ、*agālu*と訳されている(^(anše)si₃)。これこそが、前3千年紀の音価に淵源をもっているであろう¹⁸⁾。

Ⅲ. ペルシアノロバ

Ⅲ.1. anše-edin-na : シリアノロバ

祖谷勝紀は、アジアノロバ亜属として、シリアノロバ *Equus hemionus hemippus* (体高約100 cm)、(北)ペルシアノロバ (=オナガー) *Equus hemionus onager* (110~127 cm)、クーラン *Equus hemionus kulan*、チゲタイ (=モウコノロバ) *Equus hemionus hemionus* (117~142 cm、ふつう130 cm)、インドノロバ *Equus hemionus khur* (120 cm) [およびキャン (=チベットノロバ) *Equus kiang Moorcoft* 1842 (140~150 cm)] をあげる(祖谷1984)。

シリアノロバはシリア、イラク、北アラビアに生息していたというのが、20世紀初頭までにほぼ狩りつくされた。アレppo北方の平原で捕獲されていた1頭が1920年代末にウィーンの動物園で死んで、これでシリアノロバは絶滅したらしい。

前3千年紀には南部メソポタミアで「平原の<ロバ>」*anše-edin-na* が生息し、狩りの対象であった。ウル第3王朝2代王は「平原の<ロバ>」のように疾走し(Šulgi A 72)、また「平原の<ロバ>」を捕らえるさいには、彼は、ワナをしかけたり、落とし穴を掘ったり、矢を射かけたりはせず、あたかも敵であるかのように、この動物を追うという(Šulgi B 91-93)¹⁹⁾。いっぽうで彼は、「平原の<ロバ>」のように、敵をワナ、ネットで捕獲するのだとも語る(Šulgi D 169)。アッカド時代のウンマ出土文書によれば、鳥捕獲者 *mušen-du₃* が「平原の<ロバ>」を捕獲²⁾ するために縄を受けとっている(CT 50 61)²⁰⁾。ウル第3王朝時代のウンマには、「平原の<ロバ>」を管理する施設もあった(*e₂ anše-edin-na* [SAT 2 285])。都市集落からさほど離れていないところで「平原の<ロバ>」が生息していたことは確実である。少数の「平原の<ロバ>」が、イエロバの<群れ>に導入されて飼われることもあるが、この動物が人間によって本格的に使役されたことを示す記述はない。メス・「平原の<ロバ>」中心の<群れ>を記録しているのは、USP 74 (A 3397) だけである(ウンマ：アッカド時代)。USP 74, obv. 1) 40 la₂-3 SAL.ANŠE-[edin]-na, 2) 10 ANŠE.BAR.AN 2, 3) [1]¹⁾ SAL.ANŠE.BAR.AN 1, 4) [3]¹⁾+3 ANŠE.NITA₂-edin-na 1, 5) [2]¹⁾ SAL.ANŠE-edin-na 1, 6) 6 ANŠE.NITA₂.LIBIR ma₂, 7) šu-nigin₂ 62 anše, 8) Ur-eš₃ sipa-anše²¹⁾。

「平原の<ロバ>」に対応するアッカド語は *sirrimu* である。アッカド語文書でも *sirrimu* (ただ、しばしば ANŠE.EDIN.NA とも表記される) はガゼルとともに狩猟の対象とされていた。私は、*anše-edin-na: sirrimu* はやはりシリアノロバだと考える。

Ⅲ.2. ペルシアノロバ

以前はしばしば、前3千年紀にはアジアノロバ(広義のオナガー)が戦車を牽いたと概説された。ただそれは、まず図像史料にみえるウマ科動物をオナガーと理解し、しかもそれを安易に「平原の<ロバ>」と結びつけ、シリアノロバと比定してのことであった。テュービンゲン・シンポジウムに出席した動物学者は、このような説明には懐疑的だったようである。それは、馴化しにくいアジアノロバ、しかも体高1 m程度、もっとも小型の亜属が戦車を牽くとは常識外だと一蹴したC. P. グローヴズの発言(Groves 1986: 46)に典型的にあらわれている。ただ私は、ペルシアノロバが戦車に繋がれたと想定していた。

祖谷勝紀は、ペルシアノロバは北イランに300~400頭生息していると述べたが(祖谷1984)、現在、数はさらに減っているらしい。けれどもかつては、その生育領域ははるかに広大であった。スウェン・ヘディンは1905~06年のペルシア踏査行のさい、クムの東方、カビル沙漠の西端から東端まで、いたるところでノロバの足跡を見ており、またじっさいに遭遇もしている(ヘディン1979a: 213以下)。ペルシアノロバはイランよりさらに西方にも生息していたとおもわれる。前7~6千年紀、ティグリス河西方(ハトラの北)に位置するウム・ダバギヤ周辺では、ノロバとガゼルがさかんに狩られていた(Kirkbride 1974, 1975; Bökönyi 1973)。出土動物骨を分析したS. ベケニは、問題の動物はシリアノロバよりより大きく、ペルシアノロバ、クーランの範囲におさまると結論したのである(Bökönyi 1986: 315)²²⁾。

Ⅲ.3. (ANŠE.)BAR.AN と *par*

(ANŠE.)BAR.AN は前3千年紀後半シュメール南部での表記法であり、中・北部や前2、1千年紀ではしばしば文字形状がすこしかわり、(ANŠE.)ŠU₂.AN あるいは(ANŠE.)ŠU₂.MUL などと書かれる。辞書テキストでは *kunga* と読まれ、*parû* とアッカド語訳される。

「平原の<ロバ>」とちがひ、この動物は、文学テキストではまれにしかあらわれない。わずかな例では、平原を疾走する動物、あるいは狩られる動物として描かれてはいない²³⁾。いっぽうアッカド語文書(前2、1千年紀)では、*parû* はほとんどの場合ラバを意味しているようにみえる(CAD P 206-207, s.v. *parû* A)。少なくともノロバと断定で

きる文例はない。だから、おおくの研究者が、前3千年紀の (ANŠE.)BAR.AN はノロバとイエロバのあいだのコドモを指し、のちウマが導入されてイエロバと交配されはじめると、ANŠE.ŠU₂.AN / (ANŠE.ŠU₂.MUL): *parû* がラバを表すようになったと考えている。

ノロバを指す聖書ヘブライ語、古典アラビア語はそれぞれ *perê*²、*fara*² である。これらがアッカド語 *parû* と関連していると考えるのは、きわめて自然なことである。だから M. シヴィルはアラビア語「オナガー」*para*² を引きつつ、*parû* 「ラバ」は二次的な用法だとし (Civil 1994: 147)、フォン・ゾーデンは古バビロニア時代にはこの語がノロバを指していたかもしれないと想定する (Von Soden, AHw 837 s.v. *parû(m)* I 1) aB Onager?, 2) Maultier, 3) M.-Figürchen)。いずれにせよ、前3千年紀の (ANŠE.)BAR.AN を論じるのに、前2、1千年紀の *parû* を援用すべきではない²⁴⁾。

III. 4. ウマ科動物の乳飲み子

以前に私は、行政記録のなかでは乳飲み仔段階の (ANŠE.)BAR.AN がごくまれにしか言及されないことを指摘し、人びとは離乳直後のワカを捕らえ、訓練したという解釈の根拠のひとつとした。そのうち新文書があいついで公刊されたが、観察結果はゆるがない。知られるかぎり、乳飲み仔はウル第3王朝期のウンマ文書で2、3頭が記録されているだけである²⁵⁾。当時、膨大な数の動物がシュメールに到来したが、乳飲み仔・(ANŠE.)BAR.AN 到来の記録はない。「平原の<ロバ>」の乳飲み仔がけっして記述されないのとおなじなのである。いっぽうイエロバの乳飲み仔は、しばしばハハとともにシュメールにやってくる。

III. 5. 車を牽く (ANŠE.)BAR.AN (1)

初期王朝 III 期のラガシュでは、メス・(ANŠE.)BAR.AN が主として犁に、いっぽうオスは車に繋がれていた。「支配者妃の家」で消費された大麦についての月例報告書の1枚 HSS 3 34 (obv. i 1-ii 6) によれば、この組織は計7 (ANŠE.)BAR.AN ・チームと7個体を飼っていた。イエロバはいない。2チームの「大オス」*nita-ANŠE.BAR.AN gal-gal* と予備1頭には、連日1頭につき大麦4.5シラ、1チームのオス (*nita-BAR.AN*) と3頭、調教中²のオス (*nita-BAR.AN zur-zur*) 2チームと1頭、2チームのメス (*SAL-BAR.AN*)、調教中²のメス (*SAL-BAR.AN zur-zur*) 3頭には、3シラが与えられる。

ウル第3王朝時代にも、(ANŠE.)BAR.AN が車を牽くことがおおかった。たとえば TRU 43 (プズリシュ・ダガン?) は、計78チームに編成されたウマ科動物を記述しているが、うち74は (ANŠE.)BAR.AN ・チームであり、イエロバは4チームを構成しているだけである。この時代

には「ウルの軍旗」のような図像史料がのこっていないから、(ANŠE.)BAR.AN ・チームがじっさいに戦場で使役されていたかどうかは確言できない。ただ、儀礼にさいして神や王のために (ANŠE.)BAR.AN が車を牽いた。TRU 43 にみえる (ANŠE.)BAR.AN ・チームのおおくも、そのような目的で用いられたのであろう。

ウル第3王朝時代のラガシュでは、エンシグヌン神が「(都市神ニギルス)の<ロバ>飼い」*sipa-anše* とされていたが (Gudea Cyl. B x 1)、じっさいにはこの神は (ANŠE.)BAR.AN を管理していた。ニギルス神の (ANŠE.)BAR.AN を世話する人たちと「エンシグヌン神の家のスタッフ」を点検した記録 CT 1 6-7 によれば、人びとが計9 (ANŠE.)BAR.AN ・チームを飼育していた。ただ、ここで扱われているのはチームに編成される個体だけである。だから、人びとの職業は御者² *mu₆-sub₃*、手綱引き *kir₄-dab₅*、飼料のための草運び *u₂-il₂*、去勢ワカ²の牧人 *sipa-amar-ku₅* などであり、メスを管理する牧人 *sipa-(anše.)ama-gan* がここにいるわけではない。

北メソポタミアやシリアでも、事情はかわらない。ときにナガル (テル・ブラク) 王は車を駆って、支配下のナバダ (テル・ベイダル) に逗留した。Subartu II No. 109 冒頭によれば、王は11チームのウマ科動物とともに、ナバダに4日滞在し、動物たちには大麦2040シラが与えられた。Subartu II No. 109, obv. i 1) en 11 ERIN₂, 2) Na-gar₃^{ki}, 3) in 4-u₄, 4) 3 gur 0.4.0.0. かなりの研究者は、ナバダ文書で車を牽く動物チームが言及されるばあい、じっさいには (ANŠE.)BAR.AN が意味されていると推定する (e.g. Van Lerberghe 1994: 113; cp. Sallaberger 1996: 102f., 1999)。そのような車を描いた印章印影も発見されているが、車に繋がれているのは (ANŠE.)BAR.AN であつたと推測されることがおおい (e.g. Oates 2001: 289ff.)。あるナバダ文書には、67頭ものワカ・ANŠE.BAR.AN が記帳されている。Subartu II No. 31, i 1) ANŠE.BAR.AN tur-tur nita, 2) 25, 3) ANŠE.BAR.AN-SAL tur-tur, 4) 42, ii 1) UD.SAR, 2) ⁴Be-li₂-ZI, 3) šu-ni[gin₂] 67, 4) in 10-la₂ 1, 5) u₄-ba²。ナバダは、ハブル河上流地域に点在する「宿駅」のひとつでもあつた (Sallaberger 1996: 103; Bretschneider 2005)。ウマ科動物を用いて宿駅間をつなぐシステムは、ウル第3王朝時代までにシュメールにも導入されるであろう。

エブラ文書には (ERIN₂-)BAR.AN-BAR.AN が頻出する。エブラでも4頭の (ANŠE.)BAR.AN が(戦)車を牽いた。エブラはこれらの BAR.AN の大部分を、おどろくべき高価格で、はるか東方のナガル (テル・ブラク) から輸入していた。買いつけ記録がのこっているのである。ときにはエブラは、イエロバの7倍の価格で BAR.AN を獲得していた (Archi 1998: 8-10; Sallaberger 1999: 304⁷; Zarins 1986:

185, 187; Oates 2001: 292)。またエブラは、ナガルよりさらに東方のハマジ（アーキはキルクク東に比定）にたいしても、「良質のBAR.AN」を送ってくれるように懇請している（Archi 1998: 10; Sallaberger 1999: 304⁸）。ナガルを含めた北メソポタミア一帯で（ANŠE.）BAR.ANの飼育（ないし産出）がさかに行なわれていて、ワカ・BAR.ANがエブラだけでなく各地に輸出されていたのである。エウフラテス中流域のマリでもエブラと同時期の文書が数十枚出土していて、そこで（ANŠE.）BAR.ANも言及されるが（Charpin 1990: No. 38）、これらも北方から到来していた可能性がある。後にみるように、ウル第3王朝時代のシュメールにも、ハマジから（ANŠE.）BAR.ANが届けられていた。ナガルでは主にアッカド期の文書が約70点発見されたが、うち2枚は、それぞれ20頭をこえるワカ・（ANŠE.）BAR.ANを記述している²⁶。

III. 6. 車を牽く（ANŠE.）BAR.AN (2)

ウル第3王朝時代には、情報伝達のシステムが整えられた。各地に「宿駅」zi-kum₂が設置され、イエロバや（ANŠE.）BAR.ANが車を牽いて駅と駅とのあいだを往還した（Heimpel 1994）。動物たちには大麦が与えられる。たとえばギルス（＝ラガシュ）出土TCTI 1 639では、手紙を伝達する使者たちへの糧食、ついで彼らとともに動く動物チームへの大麦供与が記述される。これによれば、属州の中心地区ギルス、すこし離れたキスラ、ウンシャガに駅が作られており、ギルスおよびキスラ駅には1（ANŠE.）BAR.AN・チームと1イエロバ・チーム、ウンシャガには1イエロバ・チームが配置されていた²⁷。ギルスの隣州ウンマでも、駅に配置される（ANŠE.）BAR.ANやイエロバに大麦が与えられていた。

III. 7. （ANŠE.）BAR.ANの大規模飼育

ウル第3王朝時代のシュメールでは、（ANŠE.）BAR.ANの大需要があった。だから、おおくの（ANŠE.）BAR.ANが主としてギルスで飼われ、また、この動物がシュメール外部から到来していた。ギルスの動物のほとんども、もともと外部からもたらされていたのであろう。

TIM 6 3は、属州ギルス内にあつてウル王権が直接に管理している地区（「軍隊駐屯地」ugnim^{ki}とよばれる）で、3代王初年にギルスが大量の穀物を負担した記録である。そして文書の冒頭で、「調教中の⁹zur-zur」（ANŠE.）BAR.ANのために、また「放牧中の⁹ki-a tag₄-a」（ANŠE.）BAR.ANのために、計6,235グル60シラ（1,870,560シラ[1シラ：約1l]）という大量の穀物が準備されている。TCTL 1 639にあるように、1チーム4頭に10シラの大麦を毎日与えるとすれば²⁸、この量は約520チームの（ANŠE.）BAR.AN

を1年間養える²⁹。TIM 6 3, obv. i 1) 12 gur₇ 1990.0.0.0 la₂-1.0.0.0 še gur-lugal, 2) nig₂-zi-zi lugal, 3) 835.1.0.0 gur, 4) sa₂-du₁₁ ANŠE.BAR.AN zur-zur, 5) 1 gur₇ 1800.0.0.0 gur, 6) sa₂-du₁₁ ANŠE.BAR.AN ki-a tag₄-a, 7) 204.0.4.0 gur, 8) še Nin₉-kal-la, 9) 100.3.5.3 $\frac{1}{2}$ sila₃ gur, [] EŠ₃.KI, 10) [310.0.0.0 gur] še-ba nu-ba-a itu-2-kam, 11) ša₃ e₂-ĤAR.ĤAR, 12) 2160.0.0.0 še-ba e₂-ĤAR.ĤAR itu-12-kam, 13) šu-nigin₂ 15 gur₇ 199.0.3.3 $\frac{1}{2}$ sila₃ gur, 14) ša₃-bi-ta, ... rev. vi' 1) nig₂-ŠID-ak, 2) še ugnim^{ki}, 3) bal-2-am₃, 4) Amar-Suen 1.

ギルスでは、耕地が（ANŠE.）BAR.ANのために利用されることもあった。Maekawa, ASJ 13 Text 73によれば、計3ブル8イク（22.3 ha）の大麦耕地が他目的に利用された。このうち3ブル2イクは（ANŠE.）BAR.ANのために、また6イクは亜麻栽培に転用された。前者で動物たちを飼ったのであろう。そのための土地面積とそれを利用する主体は次のようである。ウル王（1ブル6イク）、宮宰（12イク）、宿駅（2イク）、ニンギルス神（15イク）、バウ神（3イク）。

III. 8. （ANŠE.）BAR.AN管理センター

シュメール北部のブズリシュ・ダガンから出土したPDT 1 580によれば、3代王第3年第3月に、356頭にのぼるワカ・（ANŠE.）BAR.ANが集められた。うち227頭はギルスから（1-6）、106頭は「ナイフで処理する（施設²）から」（gir₂ ba-ak-ta: 7-13）、15頭はディヤラ河流域のエシユメンナから到来し（18-23）、のこり8頭はギルスに留めおかれていた（14-17）。集められた動物はŠeš-kallaなる人物に引きわたされている。彼は「成メス・<ロバ>の牧人」sipa-(anše.)ama-ganであり、到来した（ANŠE.）BAR.ANをイエロバなどととも管理していた³⁰。PDT 1 580, 1) 71 [ANŠE. BAR.AN-nita₂ mu-3, 2) 62 ANŠE.BAR.AN-SAL mu-3, 3) 43 ANŠE.BAR.AN-nita₂ mu-2, 4) 51 ANŠE.BAR.AN-SAL mu-2, 5) 227, 6) Gir₂-su^{ki}-ta, 7) 61 ANŠE.BAR.AN-nita₂ mu-3, 8) 23 ANŠE.BAR.AN-SAL mu-3, 9) 4 ANŠE.BAR.AN-nita₂ mu-2, 10) 11 ANŠE.BAR.AN-nita₂ mu-1, 11) 7 ANŠE.BAR.AN-SAL mu-1, 12) 106, 13) gir₂ ba-ak-ta, 14) 5 ANŠE.BAR.AN-nita₂ mu-2, 15) 3 ANŠE.BAR.AN-SAL mu-2, 16) 8, 17) ša₃ Gir₂-su^{ki}, 18) 9 ANŠE.BAR.AN-nita₂ mu-3, 19) 2 ANŠE.BAR.AN-SAL mu-3, 20) 2 ANŠE.BAR.AN-nita₂ mu-2, 21) 1 ANŠE.BAR.AN-SAL mu-1, 22) 15¹, 23) Aš₂-nun^{ki}-ta, 24) šu-nigin₂ 356 ANŠE.BAR.AN ĥi-a, 25) gub-ba šu-sum-ma, 26) inim Šeš-kal-la-ta, 27) Šeš-kal-la i₃-dab₅, 28) itu u₅-bi₂-gu₇, 29) Amar-Suen 3.

属州ギルスは、知事に経営が委ねられている約10の「神殿」（第1セクター）と、ウル王権が管轄する「軍隊駐屯地」（第2セクター）からなっていた³¹。両セクターと

も、おおくの (ANŠE.)BAR.AN を飼っていたのである。ギルス内の儀礼にさいして車を牽く (ANŠE.)BAR.AN は主として第1セクターで管理され、第2セクターでは王権のために (ANŠE.)BAR.AN が飼われた。PDT 1 580 は200頭をこえる (ANŠE.)BAR.AN がギルスから集められたと記述しているが、これらは第1セクターが管理していた動物たちの一部であったろう。これらは、エシュヌンナから到来した15頭とともに、第2セクターに移されていたのではあるまいか³²⁾。

Ⅲ.9. (ANŠE.)BAR.AN の供給源

ウル第3王朝時代には、各地からおおくの動物がシュメールにもたらされた。2代王は、治世第39年にそれらを記帳し、一時的に管理する施設プズリシュ・ダガンにニップル近郊に設立した。第44年から48年にかけての計60ヶ月間にプズリシュ・ダガンに到来し、またここから「支出」された動物の総数を記した粘土板がある (AO 19548 [RA 63: 101-103])。10年たらずのうち、3代王第5年にプズリシュ・ダガンで「支出」された動物の合計頭数を記録した文書ものこっている (AO 19550 [RA 63: 103-105])。2文書に見える主要動物の頭数は表2のようである。(括弧内の数字は1月あたりの平均頭数。)

2代王治世末期に比べ、約10年のちにはイエロバと (ANŠE.)BAR.AN の到来数が激減している。他動物の数がさほど減っているわけではないから、その年には (ANŠE.)BAR.AN を送りだしていた地域とシュメールの外交関係に異変があったのかもしれない³³⁾。

(ANŠE.)BAR.AN がプズリシュ・ダガンに到来したことを記述した個別文書や「支出」記録のうち、動物がどこから送られてきたかを明示している文書だけを利用して、動物の供給元、頭数を示す。このような文書は、2代王の治世末期から次王治世前半に集中している。

デール：PIOL 19 228 (Šulgi 46 vii: オス14頭、メス6頭); Nik 2 478 (Amar-Suen 1 viii: オス18頭、メス12頭); BIN 3 419 (Amar-Suen 1 v: オス20頭、メス5頭)³⁴⁾。エシュヌンナ：Princeton 51 (Šulgi 44 iv²: オス8頭)³⁵⁾、OIP 115 331 (Šulgi 47 iv: オス2頭、メス2頭)³⁶⁾; PDT 1 580 (Amar-Suen 3 iii: オス11頭、メス3頭)。イシム・シュルギ：

AUCT 2 281 (Šulgi 48 viii: オス10頭、メス4頭)³⁷⁾。ハマジ：AUCT 1 798 (Amar-Suen 1 ix: 16頭)³⁸⁾。

デールは、エラムとの境界にある Tall 'Aqar (Badra 近郊) と比定される (Edzard-Farber 1974: 22-23)³⁹⁾。エシュヌンナはディヤラ流域地方にあり、イシム・シュルギはエシュヌンナ北方に位置するとみなされる (Edzard-Farber 1974: 86-87)。ハマジは大ザブ川からディヤラ河にいたるティグリス東岸の広い地域を指すという (Edzard 1972-75)。2代王から3代王時代にかけて、(ANŠE.)BAR.AN は、エラムとの境界にいたるまでのディヤラ流域を中心とする地域、さらにティグリス中・上流域からシュメールに送られてきたと結論してよいであろう。私は、これは初期王朝期、アッカド時代にも妥当すると思う⁴⁰⁾。

前3千年紀後半には、南部メソポタミアには、主としてザグロス山脈以西ディヤラ流域を核とする地域から、シリア西部・南部にはティグリス上流・北メソポタミア地域から、(ANŠE.)BAR.AN が供給されていたのである。エブラはナガル (テル・ブラク) から多数の (ANŠE.)BAR.AN を輸入していたし、またハマジからも輸入をはかっていた。南部メソポタミアでもエブラでも、(ANŠE.)BAR.AN の購入価格はおどろくほど高い。これは、これらの地域内でこの動物を生産・獲得することがきわめて困難であったことを示唆している。交雑種説は、この動物が主として外部世界からシュメールに到来していたとは、まったく想定していなかった。

Ⅳ. ベルシアノロバか交雑種か

Ⅳ.1. 交雑種説 (1)

(ANŠE.)BAR.AN がノロバとイエロバのあいだのコドモであるという説が成りたつためには、以下の3条件が要請される。(1) 従順な性向をもつ交雑種を作るために、ノロバ、イエロバのどちらが種オスであり、どちらがハハオヤであるかが、ただしく決定されていなければならない。(2) 交雑種のハハとなるべきメスが種オスより大きいことも必要である。(3) メスの<群れ>が人間によってきちんと管理され、交配の結果としてコドモがつぎつぎに産出されることも要求される。ラバ産出を考えれば、これらの要件は納得できるであろう。人はオス・ロバとメス・ウマから

表2 プズリシュ・ダガンにおける到来・支出動物

テキスト	動物 年	動物										
		ウシ	アカシカ	ダマシカ	ウマ	平原ノ (ノロバ)	(ANŠE.) BAR.AN	イエロバ	ヒツジ・ヤギ	ガゼル	クマ	
AO 19548	Šulgi 44-46	28601 (476.7)	404 (6.7)	236 (3.9)	38 (0.6)	360 (6.0)	727 (12.1)	2204 (36.7)	347394 (5789.9)	3880 (64.7)	457 (7.6)	
AO 19550	Amar-Suen 5	4500 (375.0)	142 (11.8)	118 (9.8)	16 (1.3)	152 (12.7)	24 (2.0)	54 (4.5)	55772 (4647.7)	1320 (110.0)	164 (13.7)	

ラバを作りだしてきたのであり、ぎゃくに気性の悪さ、体の大きさなどの理由から、オス・ウマとメス・ロバのあいだのコドモ（ケッテイ）を、人はほとんど利用しなかった。また古典作家がいうように、地中海世界ではラバの産出にあたっては、幼いときからメス・ウマの群れで育てられたオス・ロバだけが、種オスとして用いられる（たとえばアリストテレス『動物誌』577^b17）⁴¹⁾。メスを単独に用意して種オスと交配させるといったやり方では、とうてい大量の交雑種を生み出すことはできないであろう⁴²⁾。

ハインペルは（ANŠE.）BAR.AN をメス・イエロバとオス・「平原の<ロバ>」 anše-edin-na のあいだのコドモだとする（Heimpel 1990, 1994: 10²³, 1995: 89-91）。ポストゲイトは、（ANŠE.）BAR.AN をオス・イエロバとメス「平原の<ロバ>」との交配の結果とする考えに傾いているが、「平原の<ロバ>」がシリアノロバかペルシアノロバかという問いに答えることは避けている（Postgate 1986: 197, 199）。オーツは、オス・ノロバとメス・イエロバのあいだのコドモは性向がよくないとするグレイの報告（Gray 1972: 97）⁴³⁾を引用しつつ、（ANŠE.）BAR.AN をオス・イエロバとメス・ノロバ（＝メス・シリアノロバ）の交雑種と想定している（Oates 2001: 288）。

ハインペル説を積極的に支持できる材料は見だせない。文書は、しばしば、メス・イエロバ（ANŠE.）DUN.GI / ANŠE.LIBIR / anše とそのコドモを核とする<群れ>のなかに少数のワカ・（ANŠE.）BAR.AN や「平原の<ロバ>」がいることを報告しているが、種オスの役割をはたしているはずの「平原の<ロバ>」は、そこではけっして言及されない。そもそも、（ANŠE.）BAR.AN のおおくはシュメールで生まれたのではなく、北方から到来していた。

交雑種説を採るのであれば、オヤとしては、シリアノロバではなくペルシアノロバを想定するほうがよい。げんにアーキは、（ANŠE.）BAR.AN のハハをペルシアノロバだとする。彼は、「[(ANŠE.）BAR.AN のハハオヤである] 半ロバすなわちオナガー *Equus hemionus* の生息地域はふつう北イランと確認され、ナガルはその地域にもっとも近接している。けれども[ウム・ダバギヤの例からわかるように]、前3千年紀には生息域はティグリス東岸[すなわちなガルちかく]にも広がっていた十分な証拠がある」と述べている（Archi 1998: 10）。

それは第1に、（ANŠE.）BAR.AN はナガルを中心とする北メソポタミアやティヤラ流域から各地に輸出されていたからである。いっぽうこの地域は、シリアノロバの生息範囲のほぼ外縁であるようにみえる。ここでこの動物がイエロバと交配させられ、大量の（ANŠE.）BAR.AN が産出された結論するためには、かなり強引な論理が要求される。むしろ交雑説の立場からは、北メソポタミアからティグリ

ス東岸にかけての地域、すなわちイエロバ、ペルシアノロバの本来の分布域の境界において、人びとははじめて両者の交配を開始したと説明されるべきなのであろう⁴⁴⁾。

第2に、（ANŠE.）BAR.AN のハハであるためには、メス・シリアノロバは小型すぎる⁴⁵⁾。

けれども（ANŠE.）BAR.AN をペルシアノロバとイエロバの交配の産物とみなす仮説にも、やはり問題がのこる。まず第1に、メス・ペルシアノロバの体高も110 cm程度であって、さほど大きくはない。小型のメス・ノロバとオス・イエロバとの交配は、体格の改良という点で現実的だろうか。ちなみに、イエロバの祖先と考えられるアフリカノロバはもっとおおきいようである（ヌビアノロバ：約120 cm [ソマリノロバ：130～140 cm]）（祖谷1984）。

第2には、ペルシアノロバは文書でどのようによばれていたかという疑問が生じる。論理的には、つぎの3回答が用意される。(1)「平原の<ロバ>」 anše-edin-na はシリアノロバを指し、ペルシアノロバを指す語は存在しない。(2)「平原の<ロバ>」はペルシアノロバのことである。(3)シリアノロバもペルシアノロバも、ともに「平原の<ロバ>」とよばれた。

私は、すくなくともシュメールでは、「平原の<ロバ>」の語はペルシアノロバではなく、シリアノロバを指していると思う。プズリシュ・ダガン文書ではPDT 1 560がもっとも多数の「平原の<ロバ>」を記録している。それによればAb₂-ru-um-ma-ba-anなる人物が80頭のオス・「平原の<ロバ>」と197頭のオス・ガゼルを届けている。彼がディヤラ地域などの支配者であった証拠は皆無である。「平原の<ロバ>」はガゼルなどとともにあらわれても、（ANŠE.）BAR.AN に随伴してプズリシュ・ダガンに到来することはない。「平原の<ロバ>」は、南部メソポタミア周辺や西（北）諸地方から到来したのではないかという印象をうける。

ディヤラ地方や北部メソポタミアではシリアノロバもペルシアノロバも anše-edin-na と表現されていたとする仮説については、文書情報量が少なすぎて、まだ議論ができる段階ではない⁴⁶⁾。

このように（ANŠE.）BAR.AN を交雑種とする説には、克服しなければならない難点がおおすぎる。私は、ノロバとイエロバをオヤとして交雑種を大量かつ継続的に産出すると仮定するのであれば、もっとも弱点がすくないのは、メス・イエロバの<群れ>に少数のペルシアノロバを種オスとして導入するという説明だと思う。けれども現在、交雑種説を支持する研究者のだれも、そのように説いてはいないのである。

IV.2. 交雑種説(2)

さまざまな難点はあるとしても、(ANŠE.)BAR.AN = 交雑種説が固執されるのは、アジアノロバを使役することは不可能だという前提があるからである⁴⁷⁾。また西アジアで発見されるノロバの骨には、人間によって使役されたことを示す痕跡がないとされるからである⁴⁸⁾。この動物は、体形的に車に繋ぐには適切ではないともいわれる⁴⁹⁾。そしてイエロバとノロバを交配させれば、使役が容易なコドモをつくることができるという古典作家の言説があり、近代でも、ときにそれが実行されているからである。たとえばラジャスタン地方では、農民が彼らの(メス・)イエロバを野に放ち、インドノロバとのあいだに足の速いコドモをつくらせる(Postgate 1986: 200; クラットン=ブロック 1997: 52)。

アジアノロバ亜属は、各地の動物園で飼われてきた。アーメダバード動物園では、捕獲した仔・インドノロバをイエロバやポニーと同居させて慣らしていく。2才になって動物園に到来したノロバに頭絡をつけて飼育場を連れ歩くことはできたが、背中には人を乗せなかったという(デイビッド 1984: 41)。ではインドノロバやペルシアノロバの本格的な使役は、ほんとうに不可能なのだろうか。ヘロドトスは、ペルシア戦争時にクセルクセス大王の軍隊に編入されたインド人部隊では、ウマやノロバ(「オナガー」)が戦車を牽いたと叙述しているが(『歴史』7 86)、アジアノロバの使役を認めない研究者は、この章句を無視する。

IV.3. ペルシアノロバ使役の可能性

シュメール時代の文書では、(ANŠE.)BAR.AN にしばしば AMAR.AMAR という語が付加される。この語が他のウマ科動物について使われた例はない。初期王朝期には gal-gal 「完全に成長した、大きい」と対立的にあらわれるから(e.g. HSS 3 34)、これはワカ・(ANŠE.)BAR.AN に用いられると理解される。またウル第3王朝時代には ki-a tag-a (「放牧中の?」、文字どおりには「野にのこされた」)と対比されているから(TIM 6 3)、私はこの語を zur-zur 「調教中の?」と解したのである。辞書テキストでは、zur-zur は *kunnu* (“to take care of”) と訳される⁵⁰⁾。これは(ANŠE.)BAR.AN を捕獲されたペルシアノロバとする私の解釈に有利な事実であろう。

すでに述べたように、初期王朝 III 期のラガシュでは、メス・(ANŠE.)BAR.AN は犁にも繋がれていた。ラガシュには、片目あるいは両目とも損傷したメスが多数飼われていたが、これらが犁耕に用いられた⁵¹⁾。ところがウル第3王朝時代までには、この動物は農作業にはほとんど使役されなくなる⁵²⁾。当時、プズリシュ・ダガンに到来する(ANŠE.)BAR.AN の性比に極端なばらつきがあったとは、まだ結論できない⁵³⁾。到来したメスも、オスとおなじよう

に、車に繋がれていたのであろう。時代がたつにつれ(ANŠE.)BAR.AN が犁作業からは疎外されていくという事実も、ペルシアノロバ説により有利に働く。ノロバは、気質からして犁作業には適合的ではなかったからではないか。(ANŠE.)BAR.AN がイエロバとノロバの交配の産物だというのであれば、後の時代まで犁耕にもっと安定的に用いられていたはずである。

IV.4. ナバダにおけるペルシアノロバ

ナバダ(テル・バイダル)の発掘に参加した J. プレトシュナイダーは、ナバダは宿駅のひとつであったとし、さらにつぎのように述べる。「一連の文書は、旅行者たちの世話つまり人びとと動物たちへの糧食支給についての情報を与えてくれる。ある場合では、44頭のオナガー—現在主として北イランで見だされるノロバの亜属—で構成される 11 チームに 4 日間にわたって穀物を与えなければならず、これは当局にとってかなりの負担であった」(Bretschneider 2005: 57)。彼が言及しているのは、すでに引用した Subartu II No. 109 にちがいない。ともあれ彼は(ANŠE.)BAR.AN が車を牽いているとし、しかもこの動物はペルシアノロバだというのである。私と同一の見解があらわれたのである。

IV.5. (ANŠE.)BAR.AN 小像：ナガル

ナガル(テル・ブラク)では完全なウマ科動物の骨体がいくつか出土しているが(Clutton-Brock 2001; Weber 2001)、(ANŠE.)BAR.AN の比定のためには、決定的な情報として利用できないようにみえる。ただここからは、ウマ科動物の小像がおおくみつかっていて、そのなかに、人間がオスの生殖器になんらかの処置を施していると解釈される 5 小像が存在している(McDonald 2001: 272; Oates 2001: 287-289, Figs. 309, 311)。報告者オーツらは、これを、生殖器を紐で縛られているオス・オナガーの小像であると解釈した。オーツは、ナガルではメス・オナガーとオス・イエロバを交配して(ANŠE.)BAR.AN を生産していたから、オス・オナガーにこのような処置を施して、メス・オナガーとの交尾を防いでいたという(Oates 2001: 288-289)。ほんとうだろうか。交尾を防ぐためであれば、オスとメスを分離すればよいではないか。このような処置を長時間続ければ、泌尿器に障害をおこすであろう。そもそも、交雑種の産出になんら役割をはたさないオス・ノロバの小像がなぜそんなに製作されるのか。

論理的にはつぎの 3 説明が考えられるであろう。第 1 は、これをオス去勢を表象したと考えてみることである。けれどもやはり、これは、モンゴル高原でラクダについて行なわれている(小長谷 1992: 130)と同様な去勢法、すなわち辜

丸の自然脱落をうながすための処置を示しているようにはみえない。第2には、これをオーツらとおなじように生殖器が縛られている描写と解釈し、オス・(ANŠE.)BAR.AN (ペルシアノロバ) が車に繋がれる、あるいは調教されるさいの、わずかな時間だけとられた処置を示していると考えてみることである。このようにペニスにリングないし紐を結わえることで、人にたいする抵抗を弱めている、と考えてみることである。ただ私は、このような事例を民族誌のうで確認することはできないし、またこの方法がじっさいに可能であるのか、わからない。第3に、これはたんにペニスをもつオスを表象しているにすぎず、おそらく非去勢オスが描かれていると考えることである。現在私はこの解釈に傾いている。

当時ナガルは (ANŠE.)BAR.AN の輸出で名高かったはずだから、これは (ANŠE.)BAR.AN にかかわる小像にちがいない。私のように (ANŠE.)BAR.AN をペルシアノロバとみなす立場からは、この小像はまちがいにオスを表象したということになる。いっぽう (ANŠE.)BAR.AN = 雑種説に立つならば、これは (ANŠE.)BAR.AN のチチであるオス・ペルシアノロバを示していたか、オス・ペルシアノロバとメス・イエロバのあいだに生まれる (ANŠE.)BAR.AN を表していたかのいずれかということになる。ただそのばあいでも、第3の説明しか可能性はないであろう。

IV.6. ペルシアノロバ使役とウマ導入

ウマは、南ロシア、ウクライナの平原で家畜化されてしばらく後になって、すなわち前3千年紀末ないし2千年紀にはじめて、南部メソポタミアで本格的に利用される。なぜウマの導入にかなりの時が必要だったのだろうか。

前3千年紀のテキストにみえる (ANŠE.)BAR.AN がペルシアノロバだという私の考えが正しければ、このことが

理解しやすくなる。北メソポタミアからティグリス中流域地方にいたるまで、ペルシアノロバの分布域がひろがっていて、人びとはこの動物を馴化して利用していた。これがメソポタミアへのウマ導入の障害になっていたからであろう。ぎゃくにいえば、ウマ飼育の故地とメソポタミア中・南部の世界とが本格的に連結されるためには、前3千年紀の終わりまでに、北メソポタミア、ティグリス中流域地方でペルシアノロバの獲得数がしだいに減っていったということが前提とされるように思われる。ただこのことの確実な証明は、シリア (および北イラク) からの新文書の出現、この地域をフィールドとする動物考古学の進展まで待たなければならない。

IV.7. ウマ科動物とメソポタミア、シリアの一体化

ウマ科動物の呼称にかんする私の結論は、表3のように要約される。

前3千年紀後半の南・北メソポタミアとシリアは、イエロバとペルシアノロバの管理・使役という点で、一体化していた。シリアや南部メソポタミアの諸都市が、ともに北メソポタミアからペルシアノロバを輸入しただけではない。各都市のあいだを、イエロバやペルシアノロバに牽かれた車が往還しただけではない。各地の書記は、イエロバやペルシアノロバを表すために、ほぼ共通のスメログラムを用いて、ほぼ同じような役畜管理文書を作成していた。イエロバにかんしては、初期王朝III期にはシュメール南部とシュメール北部・シリアで表記法がちがっていたが、アッカド時代にはこれも克服される。シュメール文字を用いる粘土板記録が、前3千年紀メソポタミアとシリア各地の都市を連結した。この論文はその1例を示したのである。

謝辞：論文執筆にあたって、堀岡晴美さんからシュルバク文書のあつかいについて、小長谷有紀さんと祖谷勝紀氏からアジアノロバ亜属動物の生態や管理技術について、おおくの有益なコメントをいた

表3 前3千年紀後半のウマ科動物 (前川)

時代	ウマ科動物				
	地域	イエロバ	ペルシアノロバ	シリアノロバ	ウマ
初期王朝III期	シュメール南部	(ANŠE.)DUN.GI ¹	(ANŠE.)BAR.AN ⁵	anše-edin-na	—
	シュメール中・北部	(ANŠE.)SIG ₇ ²			
	シリア	(ANŠE.)IGI ³			
アッカド時代	メソポタミア、(シリア)	ANŠE.LIBIR ⁴	(ANŠE.)BAR.AN ⁵	anše-edin-na	—
ウル第3王朝時代	プズリシュ・ダガン	ANŠE.LIBIR ⁴	(ANŠE.)BAR.AN ⁵	anše-edin-na	anše ₂ ·si ₂
	ギルス、ウンマその他	anše			

1. (ANŠE.)DUN.GI : ^(anše)DUN-sig₁₇ ないし ^(anše)sig_x

2. (ANŠE.)SIG₇ : ^(anše)še(g)_x; 3. (ANŠE.)IGI : ^(anše)še(g)₂₀

4. ANŠE.LIBIR : ^(anše)še(g)_x ないし ^(anše)še₂₀³

5. ときに(ANŠE.)ŠU₂ANなどと表記。

だきました。深く感謝します。ただ論文に誤りが発見されるとすれば、すべて私が責任を負うべきものです。

註

- 1) 私は、前3千年紀後半より以前にも anše がウマ科動物の総称語であったと主張したのではない。では当初は、anše はイエロバとは異なる亜属を指していたのだろうか。ただこれは、ロバがいつ、どこで家畜化されたのかという問題と交錯する。近年には、ロバのメソポタミア家畜化説も提出された (Uerpmann 1991, 2003)。ウルク IVa 層文書の印章印影に、ライオン²に襲われるウマ科動物がみえる (AUWE 24, Abb. 47)。[公刊者はウシとするが (ibid. 51)、そのようには思えない。R. K. エングランドはウルク印影にはオナガの描写があると述べていて (Englund 1995: 121)、それはこの印影のことを指しているにちがいない。]これはシリアノロバ (後代には anše-edin-na と呼称) なのか、それともイエロバにつながるノロバだろうか。もともとは、後者が anše とよばれてはいなかっただろうか。後代の文学テキストに類出する maš₂-anše 「野の動物」は、本来「ガゼルとノロバ」を意味していたようにみえる。すなわちこの慣用句内の anše は、最古層の語義で用いられているようにみえる。
- 2) 私は 1979 年には、(ANŠE.)BAR.AN は「ウルの軍旗」に描かれていると同種のオナガ、anše-edin-na は (ANŠE.)BAR.AN とは異なるオナガでないし再野生化したイエロバとだけ書いた (Maekawa 1979b: 48¹⁵, 前川 1980: 149)。私は 1982 年に、はじめて両者をペルシアノロバ、シリアノロバと比定した (Maekawa-Yıldız 1982: 121¹; Maekawa 1991: 206-208)。また (ANŠE.)DUN.GI、(ANŠE.)BAR.AN、ANŠE.LIBIR がどのように読まれていたかについて、当時は議論できなかった。
- 3) 初期王朝期末 (ないしアッカド時代初) のテキストがウマを記述している。Barton Cylinder, xiv 10) anše-si₂-si₂ hur-sag, 11) an-še₃ al-e₁₁。ただ当時、ウマは本格的には用いられていない。アーキがいうように (Archi 1998: 11)、エブラ辞書テキスト (前 24 世紀) にみえる ANŠE.NITA.KUR: ag-lum が前 2 千年紀の ANŠE.KUR.RA に対応するかどうかは、私には確信がもてない。南部メソポタミアの辞書テキストでは、agālu は ANŠE.LIBIR (イエロバ) のアッカド語訳である。
- 4) クラットン=ブロックの記述 (1989, 1997) を、F. E. ゴイナーの古典的な論述 (1983) と比較せよ。当初彼女はアブ・サラビク出土のウマ科動物骨を馴化されたノロバと解釈していたが (Clutton-Brock-Burleigh 1978)、その後ポストゲイトにしたがって、考えを変えた (Clutton-Brock 1986)。なお彼女は、「ウルの軍旗」では戦車を牽く動物の肩部に縦線が描かれていて、イエロバとノロバの交雑を示すというが (1997: 121)、そのような線はみえない。
- 5) 私は Fö 160 にみえる amar-KUD を amar-ku₅ 「去勢ワカ」と解釈した。ウル第 3 王朝時代にはこの語は人間にも適用され、私はそれを「去勢された若い労働者」と理解した (Maekawa 1979a, 1980, 前川 1980)。これには激しい反論があり、J. パウアーは KUD: ku₅ を (ハハオヤから) 「分離する」という意味だと考えている (Bauer 1989-90: 88-89)。M. シュトルは古バビロニア時代の amar-ga.KUD に注意を向けている [ku(d)₅: parāsu “to wean”] (Stol 1995: 179, 203⁴⁴)。
- 6) シュルバク出土文書にみえる ama-GAN.ŠU-ANŠE.SIG₇-ga (WF 1 Nr. 2, rev. iii 2) は、「経産メス・ANŠE.SIG₇」を意味しているにちがいない。
- 7) TSŠ 131 では、個人名の構成要素である神名ドゥムジが限定詞 dingir をともなっている。堀岡晴美さんによれば、ファラ文書

(彼女はシュルバク文書とはよばない) にはドゥムジを構成要素とする人名記述が約 150 事例みえるが、ドゥムジに限定詞が付されているのは、あと 1 例だけだというのである。いっぽうほぼ同時代のラガシュ文書では、ドゥムジはつねに限定詞 dingir をともなう。なお堀岡晴美さんは、ファラ文書には、メソポタミア各地の人々の「ファラ」への到来、滞在、出発が記録されているという重大な結論を得つつある。

8) 表 1: ARET II 25

1. udu-udu ugula; 2. IGI-SAL-LUH; 3. 1000 × (X₁+X₂+X₃)+6788 (=60+800+500+430+28+800+2600+1000+570)=11788; X₁+X₂+X₃= 5; 4. 9400+3700+3400+100+2000+9800+7700 = 36100.

- 9) この理由から、文書公刊者は IGI をウシの一種と推定したのであろう (Edzard, ARET II p. 129)。
 - 10) 彼は当初、IGI を LULIM (=IGI=LIM)+ANŠE+LU) の簡略体とみなしたが (Archi 1980a: 3)、すぐのちにゲルプの示唆をうけ、ANŠE.LIBIR 内の LIBIR (=IGI+ŠE₃) の簡略形と考えるようになった (Archi 1980b: 36-37)。ただゲルプにしたがって、彼は IGI を「ウマ?」と訳すこともあった (e.g. Archi 1987: 122)。
 - 11) 前支配者妃の埋葬にさいして、哀泣する人たちにパンを支給した文書がある。Fö 137, iv 1) lu₂ ki-hul Bara₂-nam-tar-ra-ka, 2) er₂-SIG₇-me. 後代の文学テキストに er₂-še₈(-še₈) 「涙を流す」がみえるから、er₂-SIG₇ は er₂-še、と理解すべきなのであろう。
 - 12) Barton Cylinder, v 7) EDIN-ninda-kum₂-za, 8) ninda-kum₂ nu-mu-gal₂, 9) [E]DIN-ninda-te-za, 10) ninda-te nu-mu-gal₂, 11) gir₂-maḥ x gu₄ gu₇-gu₇-zu², 12) eš₃ Nibru⁴, 13) NI+IGI-bi a-ne ba-nu₂; v 7-8) Your oven(?), in which bread was baked, contains no baked bread. 9-10) Your oven(?), in which bread cooled down, contains no bread cooling down. 11) Your(?) supreme ox-devouring oven, 12-13) its stones(?) he made lie (idle) in(?) the sacred area of Nippur (Alster-Westenholz 1994)。アルスターらは EDIN (v 7, 9), gir₂ (11) を「竈」と、NI+IGI (13) を NI+UD (=na₄) の変異形と解釈するが、私は EDIN, gir₂ を「平原」、「サソリ」と、NI+IGI を nisig₇、「緑」「緑地」と考えたい。シュルバク行政記録に人名 NI+IGI-ga があるから (e.g. WF 49 Nr. 71, obv. v), 13 行の NI+IGI に-g を想定することは不自然ではない。11-13 行は「ウシを呑みこむ…あなたの? 大サソリが、ニップルの神殿の緑地で彼を待ち伏せした」ということになろうか。
- 南部のラガシュでは、ウル第 3 王朝期までは、/nisig/ は ni-sig₁₀ (=SUM) によって表されることがおこったらしい。「禿鷹の碑」(rev. i 3-4, 26-27, 36-37, ii 11-12) やグデア碑文 (St. B viii 61-62) で、太陽神が、「金色 (に輝く) 主」(ないし「青 (空) の主」) lugal-ni-sig₁₀-ga(k) とよばれているからである。グデア円筒碑文で nisig (=SAR) があらわれるが (Cyl. A xxi 8; B i 4)、同一文脈で SIG₇ も用いられ (Cyl. A xxx 10; B xvi 10)、SIG₇ は nisig₇ であるかもしれない。要するに、nisig (=SAR) が定着するまでは、/nisig/ を表現するために、さまざまに試みられていた。
- 13) だから ANŠE.LIBIR の出現は、ナラム・シン王時代まで下るかもしれない。
 - 14) 前註 10。アーキが IGI を ANŠE.LIBIR 内の LIBIR の簡略表現だと考えたことと、エブラ文書の年代の問題とは関連する。当初、エブラはアッカド 3 代王によって破壊されたこととみなされることがおこったからである。現在は、文書は初期王朝 III 期末とほぼ同時期とされる。
 - 15) ANŠE.DUN.GI のばあいとはちがって、ANŠE.LIBIR 内の ANŠE はほとんど省略されない。これも、ANŠE.LIBIR が新造語であることを示唆する。LIBIR (=IGI+ŠE₃) じたい、シュメール中・北部でかなり後期に創出されたらしい。libir 「古い」、「以前の」は

- アッカド語 *labiru* から借用された。ラガシュでは初期王朝 III 期末まで、この意味では *sumun* だけが用いられた。
- 16) 現在、私が提示できる可能性は DUN: dur₉ / du₂₄ である。行政文書でも文学テキストでも、しばしば DUN(-ur₃) がウマ科動物について用いられることがある。E.g. En I 23 iii' 4') [SAL.]AN[ŠE]-ama-GAN.ŠA, 5') DUN(=dur₉³)-DU-bi (ED III); RTC 72, i 3) gan₂ du₂₄-ur₃-re-gar-ra (ED III); Gudea Cyl. B ix 16) anše.du₂₄-ur₃ pirig kas₄-e pa₃-da; CT 1 6: BM 17745, vi 11) gir₃-si₃-ga, 12) ANŠE.BAR.AN du₂₄-ur₃-ra^d-Nin-gir₂-su, 13) u₃ e₂-En-sig-nun (Ur III). 辞書テキストでは dur₃(=ANŠE.NITA) がアッカド語 *mūru* (「ワカ・オス」) で説明されるから、しばしば dur₃ / du₂₄-ur₃ もオスを指すと解釈されるけれども、ほんらいの語義はことなっていたかもしれない。ただ文字サインとの関係については、まだ深刻な問題がのこっている。前3千年紀後半にはこのサインは /šah/ の音価をももち、ブタを指示していたからである (Englund 1995: 131)。
- 17) 辞書テキストは、哺乳動物や貴金属などの名詞ひとつひとつに、色彩を表す5形容詞 (「白」、「黒」、「赤」、「まだら」、「黄-青」 sig₇-sig₉) を順に付して解説していくが、ウマ科動物にはこの説明法は採られない。当時は、ウマ科動物の体色がまだ単調 (「黄-青」) だったからであろう。なお、辞書テキストに ^{na4}za-gin₃ anše-edin-na という表現がある (e.g. HAR-ra XVI 63 [MSL 10 6])。<「平原の<ロバ>」(色)のラピス・ラズリ>と解釈したい。
- 18) これまで si₅: *agālu* は、研究者によってほとんど無視されてきた (e.g. Zarins 1978: 7)。
グデア円筒碑文には anše.sig という表現がある。Cyl. B ix 15) GIŠ.gigir-ku₃ an-mul-a rin₂-na-da, 16) ANŠE.DUN.UR₃ pirig kas₄-e pa₃-da, 17) anše-da se₃-ga-da, 18) anše-sig-a anše-Eridu.KI-ka, 19) anše-dun-da E₂ KA kur-kur-ku₄ di-da, 20) lugal-bi^d Nin-gir₂-su ħul₂-la tum₂-mu-da (Edzard, RIME 3/1). 18 行にかんしては「南部のロバ、すなわちエリドゥのロバ」(Wilson, AOAT 244: 156) をのぞいて、最近では一致して「細身のロバ、(すなわち) エリドゥのロバ(が)」と訳される。けれども、anše.sig は ^{anše}sig₆、^{anše}se(g)₆ の異表現であるという解釈も、いまや深刻に考慮されるべきである。
- 19) 「シュメール文学電子コーパス」(オックスフォード大) は Šulgi B 94) gaz tur-ba dur₃ sal-la gaz-gin₇-nam la-ba-ši-ninni₂-de₃: I do not try to surround them to kill their young, as people kill slim ass foals とするが、私は「それらを殲滅するにせよ、数を減らすにせよ、(人びとが) 優美な⁷ワカ・オスを殺す(ときの) ように、(私は) それらを取り囲んだりほしない」と訳す。「電子コーパス」は tur を「ワカ(・ロバ)」と解釈し、私は「(数を) 減じる(こと)」と理解する。動詞語基 tur「減じる」が gul「破壊する」や til「終わらせる」、「殺す」と対照されている例 (LSUR 73, LSUR 47, Puzur-Šulgi to Šulgi 13) を参照せよ。
- 20) CT 50 61 114394, obv. 1) 1 eš₂-mur₈(=LAK 193) gid₂-bi, 2) 6 gi 2 kuš₃10 kab₂, ... rev. 7) šu-nigin₂ 11 eš₂-mur₈, 8) šu-nigin₂ 181 eš₂-kab₂, 9) eš₂ anše-edin-na-ka, 10) Lugal-GIŠ.SAR mušen-du₃-e, 11) šu ba-ti, 12) 5 mu 5 itu. [1本の mur₈ 縄、長さ 19 m、10本の kab₂ 縄] (1-2)。kab: *kappu* はハミ、クツワを指すことがある。kab / kab₂ はよく交代したから、(eš₂-) kab₂ もこのような意味だったかもしれない。eš₂-mur₈ がどのような縄であるのかは、よくわからない。
- 21) テュービンゲン報告書で、ザーリンスは (ANŠE.)BAR.AN をロバとノロバの交雑種とする説も成りたつかもしれないと書いて、UCP 74 (A 3397) を引いている (Zarins 1986: 187-188)。第6行にみえるのは成オス・イエロバであり、これらをチチとしてメス・「平原の<ロバ>」が (ANŠE.)BAR.AN を生んだと理解しようとしているのであろう。私は、6行は「成メス・イエロバ」 SAL.ANŠE.LIBIR maḥ₂ の誤記だと思う。maḥ₂「成熟した」は、メスにだけ適用される形容詞である。
- 22) 後註 45 参照。
- 23) ANŠE.ŠU₂.AN はオヤを知らないと擲擲され (UET 6/2 233)、ANŠE.LIBIR: *agālu* が ANŠE.ŠU₂.MUL: *parū* とともに繋がれるとからかわれる (Lambert, BWL 242)。『冬と夏』では ANŠE.LIBIR と ANŠE.ŠU₂.MUL が対照されるが(190-191)、191行は訳が困難。『ことわざ集』では、ANŠE.ŠU₂.AN に大麦を食べさせるべきではないとあるが、別版ではかわって ANŠE.LIBIR が言及される (SP 21 Sect. A 16: 3; SP 9 Sect. B 2 Vers. B: 3)。ただこれらは前2千年紀に成立しており、(ANŠE.)ŠU₂.AN、(ANŠE.)ŠU₂.MUL のイメージを前3千年紀の (ANŠE.)BAR.AN に投影させてはならない。
- 24) Cf. Militarev-Kogan 2005: 233-235 [No. 176. **par(a)* -'wild ass']. *parū* は前3千年紀の文書では見つかってはいない。ただエブラ文書とシュルバク文書に ab₂.ba₄-ru₁₂-um (MEE 3 No. 62, ii 2) = MUL.BAR.AB₂ (SF 74 Nr. 81, i 10 [= MEE 3 51-54, 10]) がみえ、シヴィルとクリスパインは、ともに、ba₄-ru₁₂-um をのちの *parū* に関連づける (Krispijn 1981-82: 48, 50; Civil 1994: 141)。この語が ab₂「メス・ウシ」に随伴するから、クリスパインは、*parū* はラバに限らず、交雑種全般を指示しているかもしれないと考えた。けれども重要なことは、ba₄-ru₁₂-um はスメログラム MUL.BAR に対応するという事実である。MUL.BAR は、南部メソポタミアの辞書テキストや行政文書にみえる BAR.AN、ŠU₂.AN、ŠU₂.MUL と実質的に同一である。げんに前2千年紀の辞書テキストには ab₂-MUL (AN:AN.AN)、ab₂-BAR.MUL、gu₄-ŠU₂.MUL がみえる (Civil 1994: 141-142)。ŠU₂.MUL、MUL は /suḥub/ と読まれ (suḥub: ŠU₂.MUL; suḥub₂: MUL)、*sugullu*「群れ」とアッカド語訳されるから、シヴィルは、suḥub の語じたい *sugullu* と関連していると推定する (**sugul*) (Civil 1994: 142, 145)。[『農夫の教え』7行に、「ウシの群れに足で(通常タイプの耕地を) 踏ませるな」 gu₄ suḥub₂ gir₃ na-ra-ab-zukum-e とある。]そして、suḥub₂ を指示するスメログラムが ANŠE サインと結合されると (ANŠE.ŠU₂.AN / ANŠE.ŠU₂.MUL)、*parū* とアッカド語訳されるのである。とすれば、*parū* やそれに対応するスメログラム BAR.AN / ŠU₂.AN / ŠU.MUL は、もともとは *sugullu* と同じように「群れ」を意味していた可能性がある。
- 25) 以下のウンマ文書が、ANŠE.BAR.AN の乳飲み仔に言及している。
1. Hussey, Buffalo 3, [Sect. 4] obv. i 21) 2 ANŠE.NITA₂-edin-na, 22) 1 ANŠE.BAR.AN-SAL mu-2, 23) 2 ANŠE.BAR.AN-nita₂ mu-1, 24) 1 ANŠE.BAR.AN-SAL mu-1, 25) 1 ANŠE.BAR.AN-nita₂ ga, 26) 3 ANŠE.SAL-maḥ₂, ii 1) 2 ANŠE.SAL šu-gi₄, 2) 1 ANŠE.NITA₂ šu-gi₄, 3) 1 ANŠE.NITA₂ amar-ga, 4) anše.ama-gan, 5) Ur-Šara₂ i₃-dab₅, ... [Sect. 6] ii 13) 1 ANŠE.BAR.AN-nita₂ ga, 14) ki U₂-a₂-na engar-<ta>, ... [Sect. 8] iv 5) [gu₄-anše⁷] DU.DU, 6) [si-i]-la, 7) [ša₃ e₂-š]u-s[um]-ma, 8) [A-a-kal]-la [en]si₂-Umma^{ki}, ...
2. Umma 3 2135, obv. 1) 1 ANŠE.BAR.AN-nita₂ ga, 2) u₃-tu-da^{is} apin, 3) ki U₂-a₂-na engar-ta, 4) Uš-mu i₃-dab₅, 5-6) ša₃ e₂-šu-sum-ma A-a-kal-la ensi₂-ka, ...
3. MVN 18 264, obv. ii 6') 32 gu₄-ab₂ ħi-a, 7') 6 anše ħi-a, 8') 1 ANŠE.BAR.AN-SAL ga, 9') 164 udu ħi-a, 10') 34 ud₅-maš₂ ħi-a, iii 1) [mu-TUM₂^dŠara₂] (?)
- 第1文書は、ウシとウマ科動物が新任知事の管理に委ねられた記録である。Sect. 4によれば、14頭のウマ科動物 anše.ama-gan が引きわたされており、このなかに2頭のオス・「平原の<ロ

バ>」、4頭の1、2オオスおよびメス・(ANŠE.)BAR.AN、1頭の乳飲み仔・(ANŠE.)BAR.ANがいた。また耕作責任者のもとにいた乳飲み仔・ANŠE.BAR.AN 1頭も委託されている (Sect. 6)。ハインペルは、この記録は (ANŠE.)BAR.AN をオス・「平原の<ロバ>」とメス・イエロバの交配の産物とする説を支持するとして (Heimpel 1995: 90-91)。オス・「平原の<ロバ>」、メス・イエロバ、ワカおよび乳飲み仔 (ANŠE.)BAR.AN がともに言及されることを重視したのである。Sect. 6 にみえる乳飲み仔は、第2文書では「犁耕チーム [役畜群] のなかで生まれた」 $u_3-tu-da^{gis}apin$ と明言されている。ただオヤの亜属を知る手がかりはない。また Sect. 4 の動物がほんらい属していた<群れ>の構造はわからない。<群れ>に「平原の<ロバ>」、(ANŠE.)BAR.AN、イエロバがいたことは事実であるが、だからといって、「平原の<ロバ>」とイエロバが交配させられ、(ANŠE.)BAR.AN を生んだとは、とうてい結論できない。

第3文書によれば、ウシ32頭、イエロバ (と (ANŠE.)BAR.AN²) 6頭、ヒツジおよびヤギ198頭のほかに、メス・(ANŠE.)BAR.AN の乳飲み仔1頭がシャラ神に献納されている。

このように、ウンマ文書で (ANŠE.)BAR.AN の乳飲み仔が記述される例は皆無ではない。しかしおおくのワカやオトナ・(ANŠE.)BAR.AN の存在にくらべると、その数はいかにも小さい。

- 26) **Eidem et al. 2001, No. 77 1)** 23 BAR¹(=LA₂).AN.ANŠE, 2) [R]a-bi₂-i[1]; No. 78, 1) 13³ BAR¹(=LA₂).AN.ANŠE amar, 2) [Ra-bi₂-i]1.
- 27) DAS 242, 243 によれば、ギルス駅には、2イエロバ・チームが配置されていた。どちらが本来のあり方であったのかはわからない。
- 28) 1日1頭あたり大麦3、4ないし5シラが与えられることもある (e.g. MVN 6 65)。
- 29) これには、飼育者たちへの支給大麦も含まれているかもしれない。ほぼ同量の大麦量を記述している BM 15308 に、「調教中²の ANŠE.BAR.AN の飼料およびそのスタッフへの大麦支給」と明記されているからである。BM 15308, **obv. ii 4)** 15.0.4.0 gur, 5) ša₃-gal amar Ni₉-kal-la, 6) 835.4.0.0 gur, 7) ša₃-gal ANŠE.BAR.AN zur-zur, 8) u₃ še-ba gir₃-si₃-ga-ba.
- 30) Šeš-kalla については、以下の文書を参照。Durand, DC 243, **obv. 1)** 12 ANŠE.BAR.AN mu-3, ... 4) [Šeš-ka]l-la sipa-a[nše].[am]a-gan, **rev. 1)** i₃-dab₅, ...; PDT 1 171, **obv. 6)** 32¹ ANŠE.LIBIR-SAL, 7) [1²] ANŠE.LIBIR-nita₂, 8) [u₄] 11-kam, 9) [ki Šeš]-kal-la sipa-ama-gan-ta, ...; PDT 1 534, **obv. 1)** 1 anše-edin-na-nita₂, 2) ki babbar-ta, 3) 7 ANŠE.LIBIR-SAL ma₂, 4) 9 ANŠE.LIBIR-SAL ša₃-su₃, 5) ki Šeš-kal-la-ta, 6) gub-ba-am₃, 7) Puzur₄-šu-ni [na]-gad, **rev. 1)** i₃-dab₅, ...
- 31) TIM 6 3 では45,189グルの「王への支出」(第1行)、その他をあわせ計54,199グル33.5シラ (16,260 kl) (13行) という膨大な量が計上されている。後者は当該年の属州ギルスの総穀物収入のちょうど50%だったはずである。当時ギルスは総収入の50%を王権のために用意したが、この文書は、その大部分が「軍隊駐屯地」(第2セクター)で消費されたことを示している。なお収入の大部分は「神殿」(第1セクター)直営耕地からの収穫であった。
- 32) ギルスから多数の (ANŠE.)BAR.AN が提供されているのは、3代王が治世2、3年にギルスの「神殿」組織を再編成したことと関連するのであろう。そのさい王は知事家族をはじめとする有力支配層の財産を没収していた (Maekawa 1996, 1997)。また PDT 1 580 は、同年同月に作成された TRU 43 (III.5 参照) と関連があると思われる。後者は74の (ANŠE.)BAR.AN・チーム、4イエロバ・チーム編成の記録であり、計314頭の動物が用意さ

れていた。数字は PDT 1 580 のそれと、さほどちがわない。

ギルス出土 HLC 2 64-65, 27 は、計1,921ブル10イク (12,452 ha) という広大な土地が人びとに賦与された記録である。王自身のために367ブルが支出されたほかは、計889ブル15イクが「軍隊駐屯地」の兵士たちに与えられるなどしている。家畜管理官 kuš₇ ya (メス・)ロバの牧人たち sipa-ama-gan には38ブル5イクの土地が用意された (ii 9-10)。私は、プズリシュ・ダガン文書にみえる Šeš-kalla は、ギルス内の「軍隊駐屯地」でウマ科動物を管理し、彼の割当地保有が HLC 2 64-65, 27 に記述されていると想像する。Šeš-kalla のもとで働くメス・ロバの牧人たち gir₃-si₃-ga anše.ama-gan に、ギルス知事は羊毛を支給している (CT 7 50 19984: Ibi-Sin 1)。

- 33) プズリシュ・ダガンに到来する (ANŠE.)BAR.AN の数が、3代王治世中頃からしだいに減少したといえるかどうか、まだわからない。4代王第3年には、すくなくとも60頭がプズリシュ・ダガンで記帳されている (PDT 1 397)。この数は、2代王治世末年頃と変わらない。
- 34) PIOL 19 228 = CST 121; Nik 2 478 = CT 32 47 104443. BIN 3 497 (Šulgi 45 vi) には、Ur-Suen が12頭のオス・(ANŠE.)BAR.AN と8頭のメスを持参したことが記述されるが、これもデールからの動物だったようにみえる。彼は、次年のデールの貢納に責任をもっていたし (PIOL 19 228, CST 121)、頭数も次年のそれと一致する。BIN 3 11 (= BIN 3 16, PDT 1 382: Šulgi 46 vii) によれば、Lugal-nirgal が15頭のオス・(ANŠE.)BAR.AN、5頭のメスをとどけている。これもディヤラ地方からの動物であったろう。候補地は、Lugal-nirgal がシャブラ職をつとめている ZI.NAM^{ki} (Edzard-Farber 1974: 245)。なお当時、ディヤラの町や村が負担する (ANŠE.)BAR.AN の頭数は、ヒツジ、ウシのばあいと同じように (Steinkeller 1987: 32-35)、一定だったようにみえる。
- 35) Princeton 51 = Dhorme, RA 9 (1912) pl. 1: SA 8(?)。
- 36) Bamu の財産の一部である (ANŠE.)BAR.AN が処分され、プズリシュ・ダガンに送られた記録。彼のウシ財産43頭の処分については、同年の AUCT 2 248 参照。彼はエシュヌナ知事であり (PDT 2 1246: Šulgi 45; CST 119: Šulgi 46)、3年前にも (ANŠE.)BAR.AN を搬送していた (Princeton 51=Dhorme, RA 9, 1912, pl. 1: SA 8)。
- 37) AUCT 2 281 = PDT 2 965.
- 38) AUCT 1 798 = MVN 3 217.
- 39) デールからは、イエロバもさかんに供給されていた。初期王朝 III 期末のラガシュ文書 (DP 239, VS NF XI 50) によれば、オス・イエロバがデール商人から購入され、のち耕作責任者に与えられている (cf. DP 513)。
- 40) ヒルツハイマーは、初期王朝 III 期エシュヌナの動物骨をシリアノバ (彼は *E. onager hemippus* と記述) と比定し、わかいノロバが食用のために捕獲され、また馴化されて車に繋がれたと想定した (Hilzheimer 1941: 9, 19-20)。これらはベルシアノバではなかっただろうか。
- 41) 同様の論述は、Pliny, *Naturalis Historia*, Book VIII.lxix171; Columella, *De Re Rustica*, Book VI.xxxvii 8.
- 42) 新疆ウイグル自治区アルトゥン山脈近くで、農民が放牧していたメス・ウマがオス・チベットノロバとのあいだにコドモを生んでいたという事例が紹介されている (周正 1986: 57-58)。ただラジャスタン地方でみられるように、この方式を意識的に採用してイエロバとノロバを交配させたとしても、おおくのコドモを安定的に獲得できるとは思えない。
- 43) アジアノロバとイエロバを交配させて作りだされたコドモの性向についてのグレイの記述 (Gray 1972: 97, 98) を引用してお

く。

♂ *Equus hemionus* × ♀ *E. asinus*: The hybrids inherit the reddish colour of the sire. They are strong animals with the hardiness of *E. asinus* and the speed of *E. hemionus*, but they are not considered suitable for work because of a tendency to be bad-tempered. They are believed to be sterile.

(*Equus. asinus*) × *Equus hemionus hemionus* Pallas [Kulan, Chigetai]: ... The hybrids were hardy but difficult to manage.

♂ *E. h. kiang* × ♀ *E. asinus*: ... Two ♀ hybrids reported by Bronzini were normally viable, but they were difficult to manage.

♂ *E. h. onager* × ♀ *E. asinus*: The hybrids were said to be larger and of better appearance than mules or asses. They are easily tamed, but probably could not be domesticated without prolonged selective breeding. ... One of the live foals (a ♂) had a gestation period of 366 days, while the other (a ♀) had a gestation period of 347 days. Both were intermediate in type. The ♀ was more turbulent than the ♂. ...

- 44) エルプマンは、ロバはメソポタミアで家畜化されたと考える。アラビア半島湾岸の諸遺跡でノロバが確認され、最古のイエロバがシュメール南部のウルクで発見されているからである。そして彼はポストゲイトを援用しつつ、メソポタミアでイエロバとともにアジアノロバが生息していたから、両者の交配が可能となったという (Uerpmann 1991: 30, 2003)。けれども、この説明は成立困難である。イエロバとシリアノロバの交配が想定されているからである。
- 45) オーツもこれを気にかけていたかもしれない。彼女は (ANŠE.) BAR.AN のハハをシリアノロバとみなすが、そのさい、ウム・ダバギヤのノロバは、ベケニがいうようにペルシアノロバでなくシリアノロバの祖であって、しかも大型であったというエルプマンの考え (個人的に伝えられたという) を、わざわざ引用しているからである (Oates 2001: 286)。ただエルプマンの1991年論文にかんしていえば、ウム・ダバギヤの動物にはアジアノロバ (彼はシリアノロバを想定) よりも大きな個体が含まれ、それはノロバ[家畜化される以前のロバ]であると述べているだけで (Uerpmann 1991: 29)、ウム・ダバギヤの動物の体高はペルシアノロバ、クーランの範囲におさまるといふベケニの結論に直接反論しているのではない。
- 46) 前24世紀のナバダ文書には、「平原の<ロバ>」の管理者?に与える大麦支給の記述がある。アッカド時代にはいると、「平原の<ロバ>」はシュメールの文書でしばしば言及されるが、ディヤラ流域地方やガスル (キルクク近郊、のちのヌジ) から出土した文書には、現在のところ発見できない。ヌジ文書には言及がある (CAD S 318-319, s.v. *sirrimu*)。

- 47) 最近では Van den Driesch 1999; Van den Driesch-Lauling 2001; Uerpmann 2003.
- 48) たとえばエシュメンナのウマ科動物骨 (前註40) についてのクラットン=ブロックの論 (クラットン=ブロック 1989: 165; 1997:119, Clutton-Brock 1986: 210-211) を参照。
- 49) “The Director of Whipsnade Park of the Zoological Society of London states of the Persian onagers in his keeping that they are unhandleable and indeed unapproachable with inherently intractable dispositions and, while reasonably fleet of foot, are narrow-chested—not the sign of a good draught animal” (Noble 1969: 485).
- 50) 初期王朝 III 期やアッカド時代では zur-zur は職名でもあり (「牧人」Tierpfleger と解される)、人名としても、しばしばあらわれる。『スドの結婚』では、「(メス・ヒツジが仔・ヒツジを、メス・ヤギが仔・ヤギを) かわいがる」の意で用いられている。ただシヴィルは「飛び跳ねる」と訳す。Marriage of Sud [Civil, JAOS 103] 111) u₈ sila₄ uz₃ maš₂ zur-zur-re []/[-r]a a-da-min₃ ne e-ne []: Ewes and lambs, goats and kids, romping and fighting.
- 51) Fö 195 によれば、耕作責任者たちが50頭のオス・ウシ、19頭のオス・イエロバ、1頭のオス・(ANŠE.)BAR.AN、24頭のメス・(ANŠE.)BAR.AN を管理した。(ANŠE.)BAR.AN のうち5頭は片目が見えず、8頭は両目とも見えていない。イエロバやウシにくらべ、目の損傷度が異常に高いのである。翌年の同種の文書 (Fö 66) でも、おなじことが観察される (表参照)。私は、これは (ANŠE.)BAR.AN は捕獲のさいに、あるいは訓練中にしばしば目を傷めたことを示すと考えた (Maekawa 1979a: 100-101, 130³⁵, 前川 1980: 138-139, Maekawa 1991: 208)。ただハイネベルは、役畜の眼疾は珍しくないとかたづけてしまう (Heimpel 1995: 90)。オーツのように、人が故意に傷つけたとは解釈できない (Oates 2001: 292)。Fö 66 が書かれた翌年に、両目とも健全な2頭のオス・(ANŠE.)BAR.AN、メス8頭が、耕作責任者たちに供給されていたからである (Babyloniaca 4 247: Edin. 09-405, 35)。そして同年同月には、管理されていた (ANŠE.)BAR.AN やイエロバのうち6頭が他者に分与され、犬に与えられ、また売却された (RTC 50)。1頭のメス・(ANŠE.)BAR.AN の売却価格は20シェケル、オス・イエロバは4ないし6シェケルであった。ただ処分された役畜が目を傷めていたのかどうか、記述されていない。
- 52) ウル第3王朝時代には、面積6ブル (39 ha) 程度の公共耕地ユニットを墾耕させるために、1ユニットにつきオス、メス、コドモをふくめ約10頭の畜群 (ウシないしイエロバ) が飼育された。この種の畜群の点検記録が多数のこっているが (Heimpel 1995)、そのなかでは TCTI 1 877 (ギルス) だけが、役畜群のなかにご

耕畜の目の状態 (初期王朝 III 期ラガシュ) [註 51]

動物	目の状態				記述なし
	テキスト(年)	「両目が健全」	「片目が健全」	「両目が見えない」	
オス・ANŠE.BAR.AN	Fö 195 (Lug. 4)	0	1	0	0
	Fö 66 (Lug. 5)	2	0	0	0
メス・ANŠE.BAR.AN	Fö 195 (Lug. 4)	12	4	8	0
	Fö 66 (Lug. 5)	10	4	5	0
オス・イエロバ	Fö 195 (Lug. 4)	12	1	0	6
	Fö 66 (Lug. 5)	16	2	2	0
オス・ウシ	Fö 195 (Lug. 4)	32	2	0	16
	Fö 66 (Lug. 5)	34	0	0	11

く少数の(ANŠE.)BAR.ANが含まれていることを記録している。ただウンマでは、役畜群で1頭の(ANŠE.)BAR.ANが誕生した報告がある(前註25)。

- 53) 2代王治世44年の Gomi, BJRL 64/1 63によれば、「王への持参物」として95頭のオス・(ANŠE.)BAR.AN、125頭のメスが到来している。ただ、治世末期から次王時代にかけてディヤラ地方からもたらされた(ANŠE.)BAR.ANについての諸個別記録では、オスとメスの割合は2:1にちかい。このちがいの理由は、まだよくわからない。

文献

- Alster, B.—A. Westenholz 1994 The Barton Cylinder, *Acta Sumerologica* 16: 15-46.
- Archi, A. 1980a Allevamento e distribuzione del bestiame ad Ebla, *Annali di Ebla* I: 1-33.
- Archi, A. 1980b Ancora su Ebla e la Bibbia, *Studi Eblaiti* II/2-3: 17-40.
- Archi, A. 1987 Gifts for a prince, *Eblaitica* I: 115-124.
- Archi, A. 1998 The regional state of Nagar according to the texts of Ebla, *Subartu* IV/2: 1-15.
- Bauer, J. 1989-90 Altsumerische Wirtschaftsurkunden in Leningrad, *Archiv für Orientforschung* 36/37: 76-91.
- Bökönyi, S. 1973 The fauna of Umm Dabaghiyah: A preliminary report, *Iraq* 35: 9-11.
- Bökönyi, S. 1986 The equids of Umm Dabaghiyah, Iraq. In Meadow — Uerpmann eds. 1986: 302-317.
- Bretschneider, J. 2005 Life and death in Nabada, *Scientific American*. Special Edition 15/1: 52-59.
- Charpin, D. 1990 Nouvelle tablettes présargoniques de Mari, *M.A.R.I.* 6: 245-252.
- Civil, M. 1966 Notes on Sumerian lexicography, I, *Journal of Cuneiform Studies* 20: 119-124 [esp. 121-122: 2. The reading of ANŠE.KUR.RA].
- Civil, M. 1994 *The Farmer's Instructions: A Sumerian Agricultural Manual*. Barcelona, Editorial Ausa.
- Clutton-Brock, J. 1986 Osteology of the equids from Sumer. In Meadow — Uerpmann eds. 1986: 207-229.
- Clutton-Brock, J. 2001 Ritual burials of a dog and six domestic donkeys. In D. Oates et al. 2001: 327-333.
- Clutton-Brock, J.—R. Burleigh 1978 The animal remains from Abu Salabikh: A preliminary report, *Iraq* 40: 89-100.
- Edzard, D. O. 1972-75 Hamazi, *Reallexikon der Assyriologie* Bd. 4: 70-71.
- Edzard, D. O.—G. Farber 1974 *Répertoire Géographique des Textes Cunéiformes* Bd. 2: *Die Orts- und Gewässernamen der Zeit der 3. Dynastie von Ur*. Wiesbaden, Dr. Ludwig Reichert.
- Eidem, J., Finkel, I., & M. Bonechi 2001 The third-millennium inscriptions. In D. Oates et al. 2001: 99-120.
- Englund, R. K. 1995 Late Uruk pigs and other herded animals. In U. Finkbeiner et al. eds., *Beiträge zur Kulturgeschichte Vorderasiens: Festschrift für Rainer Michael Boehmer*: 121-133. Mainz, Verlag Philipp von Zabern.
- Englund, R. K. 1998 Texts from the Late Uruk Period. In J. Bauer et al., *Mesopotamien. Späturuk-Zeit und Frühdynastische Zeit*, 15-233. Freiburg Schweiz, Universitätsverlag; Göttingen, Vandenhoeck & Ruprecht.
- Gelb, I. J. 1955 *Old Akkadian Inscriptions in Chicago Natural History Museum*. Chicago, Chicago Natural History Museum.
- Gray, A. P. 1972² *Mammalian Hybrids: A Check-List with Bibliography*. Slough, Commonwealth Agricultural Bureaux.
- Groves, C. P. 1986 The taxonomy, distribution, and adaptations of recent equids. In Meadow — Uerpmann eds. 1986: 11-65.
- Heimpel, W. 1990 Maultier, *Reallexikon der Assyriologie* Bd. 7: 602-605.
- Heimpel, W. 1994 Towards an understanding of the term siKKum, *Revue d'Assyriologie* 88: 5-31.
- Heimpel, W. 1995 Plow animal inspection records from Ur III Girsu and Umma, *Bulletin on Sumerian Agriculture* 8: 71-171 [esp. 89-91: Excursus on Maekawa's identification of anse-kúnga with the Persian onager].
- Heimpel, W. 2003-2005 Onager, *Reallexikon der Assyriologie* Bd.10: 91-92.
- Hilzheimer, M. 1941 *Animal Remains from Tell Asmar*. Chicago, University of Chicago Press.
- Kirkbride, B. 1974 Umm Dabaghiyah: A trading outpost?, *Iraq* 36: 85-92.
- Kirkbride, B. 1975 Umm Dabaghiyah 1974: A fourth preliminary report, *Iraq* 37: 3-10.
- Krispijn, Th. J. H. 1981-82 Die Identifikation zweiter lexikalischen Texte aus Ebla MEE III Nr. 62 und 63, *Jaarbericht Ex Oriente Lux* 27: 47-59.
- Landsberger, B. 1967 Über Farben in Sumerisch-Akkadischen, *Journal of Cuneiform Studies* 21: 139-173.
- McDonald, H. 2001 Third-millennium clay objects. In D. Oates et al. 2001: 269-278.
- Maekawa, K. 1979a Animal and human castration in Sumer, Part 1: Cattle (gu4) and equids (ANŠE.DUN.GI, ANŠE.BAR×AN) in pre-Sargonic Lagash, *Zinbun* 15: 95-137.
- Maekawa, K. 1979b The ass and the onager in Sumer in the late third millennium B.C., *Acta Sumerologica* 1: 35-62.
- Maekawa, K. 1980 Animal and human castration in Sumer, Part 2: Human castration in the Ur III period, *Zinbun* 16: 1-55.
- Maekawa, K. 1991 The agricultural texts of Ur III Lagash of the British Museum (VII), *Acta Sumerologica* 13: 195-235 [esp. 206-210: III 2. ANŠE.BAR×AN: the Persian onager].
- Maekawa, K. 1996, 1997 Confiscation of private properties in the Ur III period: A study of é-dul-la and níg-GA, *Acta Sumerologica* 18: 103-168, 19: 273-291.
- Maekawa, K.—F. Yıldız, 1982 Animal and human castration in Sumer, Part 3: More texts of Ur III Lagash on the term amar-KUD, *Zinbun* 18: 95-121.
- Meadow, R.H.—H.-P. Uerpmann eds. 1986 *Equids in the Ancient World*. Wiesbaden, Dr. Ludwig Reichert Verlag.
- Meadow, R.H.—H.-P. Uerpmann eds. 1991 *Equids in the Ancient World*, Vol. II. Wiesbaden, Dr. Ludzig Reichert Verlag.
- Militarev, A.—L. Kogan 2005 *Semitic Etymological Dictionary* Vol. II: *Animal Names*. Münster, Ugarit-Verlag.
- Noble, D. 1969 The Mesopotamian onager as a draught animal. In P. J. Ucko—G.W. Dimbleby eds., *The Domestication and Exploitation of Plants and Animals*: 485-488. Chicago, Aldine Publishing Company.
- Oates, D. et al. 2001 *Excavations at Tell Brak Vol. 2: Nagar in the Third Millennium BC*, Cambridge—London, McDonald Institute for Archaeological Research, University of Cambridge—British School of Archaeology in Iraq.
- Oates, J. 2001 Equid figurines and 'chariot' models. In D. Oates et al. 2001: 279-293.
- Pomponio, F. et al. 1994 *Early Dynastic Administrative Tablets of Šuruppak*. Napoli, Istituto Universitario Orientale.
- Postgate, J. N. 1986 The equids of Sumer, again. In Meadow — Uerpmann eds. 1986: 194-206.

- Sallaberger, W. 1996 Grain accounts: Personnel lists and expenditure documents, *Subartu* II: 89-106.
- Sallaberger, W. 1998 The economic background of a seal motif: A philological note on Tell Beydar's wagons, *Subartu* IV/2: 173-178.
- Sallaberger, W. 1999 Nagar in den frühdynastischen Texten aus Beydar. In K. Van Lerberghe—G. Voet eds., *At the Crossroads of Civilizations in the Syro-Mesopotamian Realm*: 393-407. Leuven, Peeters Press.
- Steinkeller, P. 1985 Three Assyriological notes 1: The verb *se₁₁* "to live" in Pre-Sargonic and Sargonic Nippur texts, *Acta Sumerologica* 7: 195.
- Steinkeller, P. 1987 The administrative and economic organization of the Ur III state: The core and the periphery. In M. Gibson—R.D. Biggs eds., *The Organization of Power: Aspects of Bureaucracy in the Ancient Near East*: 19-41. Chicago, Oriental Institute of the University of Chicago.
- Steinkeller, P. 1995 Sheep and goat terminology in Ur III sources from Drehem, *Bulletin on Sumerian Agriculture* 8: 49-70.
- Stol, M. 1995 Old Babylonian cattle, *Bulletin on Sumerian Agriculture* 8: 173-213.
- Uerpmann, H.-P. 1991 *Equus africanus* in Arabia. In Meadow—Uerpmann eds. 1991: 12-33.
- Uerpmann, H.-P. 2003 Gedanken und Beobachtungen zur Equiden-Hybridisierung im Alten Orient. In R. Dittmann et al. (hrsg.), *Altertumswissenschaften im Dialog: Festschrift für Wolfram Nagel zur Vollendung seines 80. Lebensjahre*: 549-566. Münster, Ugarit-Verlag.
- Van Lerberghe, K. 1996 The livestock, *Subartu* II: 107-117.
- Von den Driesch, A. 1993 Hausesel contra 'Hausonager': Eine kritische Bemerkung zu einer Untersuchung von J. Bollweg und W. Nagel über die Equiden Vorderasiens, *Zeitschrift für Assyriologie* 83: 258-267.
- Von den Driesch, A.—P. Lauling 2000 Pferd (Esel, Halbesel, Maulesel, Maultier) D, *Reallexikon der Assyriologie* Bd. 10: 493-503.
- Weber, J. A. 2001 A preliminary assessment of Akkadian and post-Akkadian animal exploitation at Tell Brak. In D. Oates et al. 2001: 345-350.
- Zarins, J. 1976 *The Domestication of Equidae in Third Millennium B.C. Mesopotamia*. PhD. Dissertation, University of Chicago.
- Zarins, J. 1978 The domesticated equidae of third millennium B.C. Mesopotamia, *Journal of Cuneiform Studies* 30: 3-17.
- Zarins, J. 1986 Equids associated with human burials in third millennium B.C. Mesopotamia: Two complementary facets. In Meadow—Uerpmann eds. 1986: 164-193.
- J. クラットン=ブロック (増井光子監修・増井久代訳) 1989 『動物文化史事典: 人間と家畜の歴史』原書房。[Clutton-Brock, J. 1981 *Domesticated Animals from Early Times*. London, British Museum (Natural History).]
- J. クラットン=ブロック (桜井清彦監訳・清水雄次郎訳) 1997 『馬と人の文化史』東洋書林。[Clutton-Brock, J. 1992 *Horse Power: A History of the Horse and Donkey in Human Societies*. London, Natural History Museum.]
- 周正 (田村達弥訳) 1986 『崑崙の秘境探検記』(中公新書821)。
- 小長谷有紀1992 「モンゴルにおける家畜の去勢とその儀礼」『北方文化研究』21 121-161 頁。
- 祖谷勝紀1984 「ロバ、ノウマのなかま」今泉吉典 (監修) 『世界の動物 分類と飼育4: 奇蹄目+管歯目+ハイラックス目+海牛目』15-22 頁 東京動物園協会。
- ゾイナー, F. E. (国分直一・木村伸義訳) 1983 『家畜の歴史』法政大学出版局。[Zeuner, F. E. 1963 *A History of Domesticated Animals*. London, Hutchinson.]
- ディビッド, R. (祖谷勝紀訳) 1984 「インドノロバの繁殖」今泉吉典 (監修) 『世界の動物 分類と飼育4』41 頁。
- ヘディン (羽島重雄訳) 1979a, b 『陸路インドへ上、下』ヘディン探検紀行全集5~6 白水社。
- 前川和也1980 「古代シュメールにおける家畜去勢と人間去勢」中村賢二郎編『前近代における都市と社会層』131~244 頁 京都大学人文科学研究所。

前川和也

国士舘大学21世紀アジア学部

Kazuya MAEKAWA

School of Asia 21, Kokushikan University